

富田林市遺跡調査会報告21

桜井遺跡報告書

2015年3月

富田林市遺跡調査会

富田林市遺跡調査会報告21

桜井遺跡報告書

2015年3月

富田林市遺跡調査会

はじめに

桜井遺跡は富田林市の北西部に位置する遺跡で、かねてより古代から中世にかけての遺構が濃密に分布する遺跡として知られています。

古代の桜井遺跡については、藤澤一夫氏によって桜井の西南約1kmにあった飛鳥時代創建の新堂廃寺の造営氏族と関わりのある地域ではないか、と提示されたことがありました。つまり新堂廃寺の造営氏族の候補として「桜井田部連」、「桜井臣」などが想定され、それらの氏族の本貫地、あるいは桜井遺跡のある「桜井」集落一帯に「桜井の屯倉」があったのではないかと考えたのです。しかし、残念ながらいまだにその実態は解明されていません。

中世になると桜井遺跡も含めて南河内一帯は、南北朝期の争乱から室町期の河内国守護畠山一族の争いなども起こり、文献資料にもたびたび登場するようになります。今回の調査区から南西0.1kmには、そのような時期に登場してくる喜志城跡に想定された遺跡があります。現在、喜志城跡と想定されている場所も含めて、周辺域のほとんどは開発の波にさらされて住宅化され、その結果、城郭が構築されていた痕跡もまったくない平坦地が広がるだけとなっています。しかし、東にある石川を天然の堀として、喜志城は現位置に築かれたのではないかと想定されてきたのです。喜志城の城主は畠山政高、元弘2年の赤阪城攻めの際に落城したと伝えられています。ただし、現在想定されている喜志城跡付近からは、城郭跡に関わる遺構は、今までのところ発掘調査で確認されていないため、喜志城が本当に想定されている付近にあったのかどうかの実態は分かっていません。しかしながら、今回の調査でも、それまでの調査でも中野北遺跡も含めて、中世の遺物の出土や遺構の検出が多くなされてきた事実は見逃すことはできません。中世の富田林には相当数の人々の往来があったことは想像に難くないのです。とりわけ、16世紀後半にはいって富田林寺内町が成立する背景には、その前段階からすでに富田林市域において盛んに開発が進んでいたことが想定され、その頃になって、現在の富田林市の原型が造られたと推測されます。

最後になりましたが、調査および本書の刊行にご協力いただきました地元住民の皆様や関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成27年3月

富田林市遺跡調査会

理事長 堂山博也

例 言

1. 本書は、共同集合住宅の建設に伴い富田林市遺跡調査会が平成14年度に緊急発掘調査を実施した桜井遺跡の調査報告書である。
2. 本調査に先立つ試掘調査は富田林市教育委員会文化財課文化財振興係の今西 淳（現：富田林市市役所）が行い、調査区として設定した範囲を、富田林市遺跡調査会が受託して行った。
3. 現地における発掘調査は横山成己（現：国立大学法人山口大学）が担当し、平成14年10月18日に着手し、同年11月8日に終了した。内業調査は、富田林市教育委員会文化財課文化財振興係 栗田 薫が担当し、平成26年度内業調査を実施した。
4. 現地における記録写真撮影は横山が、遺構等の実測は横山、今西 淳、藤田徹也（現：茨木市教育委員会）、龍見 剛（株式会社アート）が行った。
5. 遺物実測は栗田が行った。
6. 砥石の石材鑑定は森山義博氏にご教示いただいた。
7. 本書に掲載されている挿図類の製図・整図は横山・栗田が行った。
8. 遺構の表記でLNを付した略号は、発掘調査時に使用したものである。LN1～LN3は各層の堆積順序を示す。LN11以降、LN111まで付された略号は、それぞれ個別の遺構を示している。出土遺物にはこの略号で注記して出土位置を記録している。
9. 本書では方位は磁北を示し、標高は東京湾標準海面値（T.P.）を示す。また、現調査における土色と遺物の色調については、農林水産省農林水産技術会事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を使用した。
10. 出土遺物及び調査記録類は富田林市立埋蔵文化財センターで適正に保管している。
11. 本書の執筆は横山・藤田・栗田が行った。執筆分担については各章節文末に記す。なお、本書の編集は栗田が行った。

目 次

はじめに

例言

第1章 調査地周辺の地理的・歴史的環境	1
第2章 調査に至る経過	4
第3章 調査成果	5
第1節 基本層序	5
第2節 遺構	11
第3節 出土遺物	19
第4章 まとめ	24
註	26
引用文献	27

表 目 次

表1 遺構規模および出土遺物一覧表	7～10
表2 遺物観察表	28～34

挿 図 目 次

第1図 富田林市内遺跡分布図	3
第2図 調査区位置図	4
第3図 第1層・第2層・第3層・鋤溝1出土遺物	5
第4図 出土遺構平面図・断面図	6
第5図 溝1・溝2断面図	11
第6図 溝1出土遺物	12
第7図 溝2出土遺物	13
第8図 溝2出土遺物	14
第9図 土壙1・土壙2・土壙6・土壙7・土壙11出土遺物	15
第10図 Pit35・Pit36出土遺物	17
第11図 Pit35平面図・断面図	18
第12図 木の根による攪乱出土遺物	18

図版目次

- 図版 1 (上) 上層遺構検出状況 (北から)
(下) 下層遺構検出状況 (北から)
- 図版 2 (上) Pit35 遺物出土状況 (南東から)
(下) 溝 2 底面遺物出土状況 (西から)
- 図版 3 (上) 溝 2 土層断面 (A - A') (東から)
(下) 溝 2 土層断面 (B - B') (西から)
- 図版 4 (上) 溝 1 完掘状況 (南東から)
(下) 井戸 1 (北から)
- 図版 5 (上) 下層遺構完掘状況 (東から)
(下) 調査区西壁土層断面 (南東から)
- 図版 6 (上) 調査区南壁土層断面 (北西から)
(下) 調査風景 (北西から)

第1章 調査地周辺の地理的・歴史的環境

【地理的環境】

本書で報告する桜井遺跡は、行政区分大阪府富田林市桜井町と川面町にまたがる古代から中世に至る複合遺跡である。遺跡の範囲は、東西 600m 南北 350m に及び、今次調査区はその南東端、川面町一丁目に所在する。

地形的には、市域のほぼ中央を北流する石川と市域西側部分を占める羽曳野丘陵の間に形成された中位段丘上に立地しており、今次調査区はその東縁部にあたる。周辺には、喜志遺跡、喜志西遺跡、桜井北遺跡、粟ヶ池遺跡、中野遺跡など多くの遺跡が展開している。また、調査区付近を東西に通る府道 32 号線を挟んだ南側には中野北遺跡が隣接している。

石川左岸の中位段丘は、南接する河内長野市域から北接する羽曳野市域まで緩やかに標高を下げながら羽曳野丘陵裾部とほぼ平行しながら続いている。この中位段丘東側の石川との間には、沖積地や低位段丘が形成されているが、これらとの境となる段差は明瞭で、その差が 5m を越える箇所が市域各所にみられる。

特に、今次調査区周辺や南方の中野東町付近では、沖積地と中位段丘との段差は 10m 以上を測る。この段差は高低差があるだけではなく、東西方向に短い急な斜面であり、ほぼ垂直に近い段丘崖となっている。また、下面の沖積地は、石川と金剛山地を水源とする千早川の合流地点にあたり、両河川の氾濫によって運ばれた砂層の堆積によって市域の石川左岸の中では最も広い面積が形成されている。

こうした地形的特長は、土地開発にも影響を与え、周辺の中野、桜井、川面地区では、中位段丘上東縁部に近いところで集落が形成され、その下面である沖積地が耕作地として利用されるという状況が近年まで続いていた。

【歴史的環境】

本遺跡が立地する石川左岸の段丘上では、後期旧石器時代から人の営為が認められ、国府型ナイフ形石器や木葉形尖頭器、有舌尖頭器が段丘上の各遺跡において散見できるが、遺構などの検出はない。この状況は縄文時代も変わらず、遺物の出土は認められるものの、明確な遺構に伴うものではなく、具体的な生活痕跡を窺い知る段階には至っていない。

弥生時代に入ると石川左岸段丘上では、多くの遺跡が確認できるようになる。本遺跡の北側約 500m 先に位置する喜志遺跡では、第 I 様式期中段階の壺が確認されている他に、中期になると住居跡や方形周溝墓など集落の様相が明瞭に確認できるようになる。この他にも喜志西遺跡、中野遺跡、甲田南遺跡など中期に盛行する遺跡がみられる。しかし、これらの遺跡は後期まで継続して盛行する状況は確認できず、後期になると、石川右岸で彼方遺跡に代表されるような高地性集落が営まれるようになる。

古墳時代になると、羽曳野丘陵の東縁部に古墳が築かれるようになる。前期では、北から鍋塚古墳、真名井古墳、宮林古墳、甘山古墳が点在し、中期では新家古墳や川西古墳が挙げられる。これらは、周辺の喜志、中野、甲田南遺跡を基盤とした集団の首長墓として捉えられる。後期でも、羽曳野丘陵東縁部という地理的な状況を変えず平 1・2 号墳、甘山南古墳などの木棺直葬の古墳がみられる。これらは、石川左岸に位置する嶽山古墳群や田中古墳群などが横穴式石室で構成される状

況とは異なり、群集形態をとらず点在してみられる。

終末期には、羽曳野丘陵の東縁部にお亀石古墳、宮前山古墳、南坪池古墳が築造される。お亀石古墳は、家形石棺を内部構造にもつ横口式石槨であるが、この石槨の外護施設に使用された瓦が近接するオガンジ池瓦窯で焼かれたことが判明している（栗田 2002）。この瓦窯は、もともと新堂廃寺跡の瓦を焼くために開窯された瓦窯で、これらの事実から3者は密接な関連性があったことが窺える。平成 14 年にはこれらの3者を合わせて国史跡として指定されている。

周辺遺跡では、中野遺跡が新堂廃寺跡と同時期に集落として展開し、相互の位置関係からも新堂廃寺跡と深く関連する集落と想定されている。古代に該当する遺跡としては、中野遺跡の他に、東高野街道沿いに多数確認できるようになる。中でも畑ヶ田南遺跡では、現在の東高野街道沿いに隣接、平行する形で石敷きの道路状遺構が検出されている（藤田 2004）。

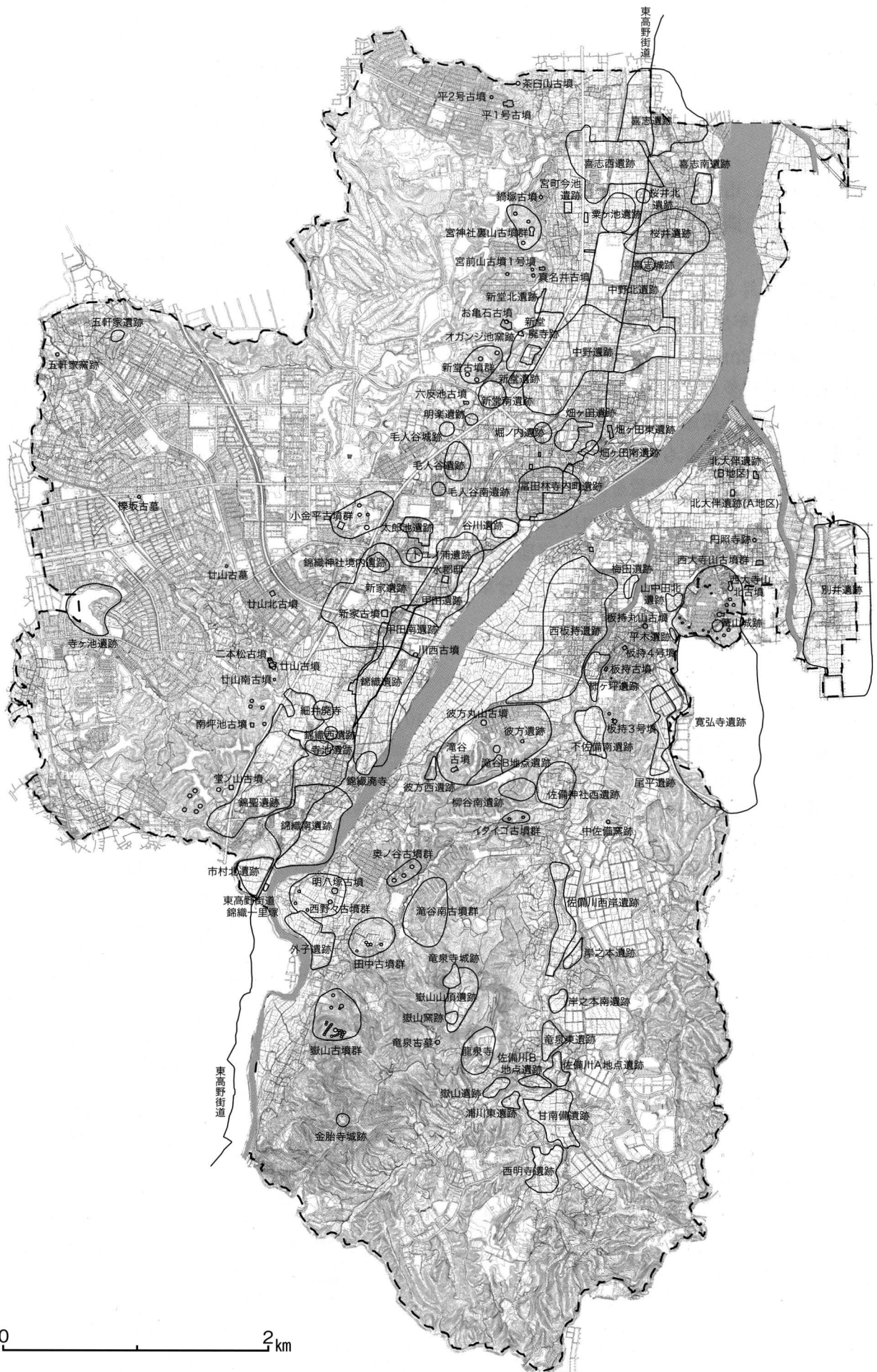
しかしながら、これらの各遺跡は、中世前半期にまで継続する遺跡は少なく、中野遺跡や甲田南遺跡などにおいて当該期の土器である和泉型瓦器椀Ⅰ期の資料が認められる他は、見当たらない。中野遺跡では初現期の和泉型瓦器椀以外に瓦も多数出土しており、中世寺院の存在も指摘されているが、調査事例の大半が未報告であるため、詳細は明らかではない。

本遺跡と隣接する中野北遺跡では、和泉型瓦器椀Ⅲ期段階の集落跡が検出されている。市内各遺跡でも本格的に中世集落が展開し始めるのはこの時期からであり、喜志西遺跡、甲田南遺跡、新家遺跡などがみられる。和泉型瓦器椀Ⅳ期以降では新たに錦聖遺跡なども確認できる。錦聖遺跡では土師皿の焼成窯と考えられる遺構や（平方 1997）（註 1）、また新堂廃寺跡付近では、14 世紀代の区画溝を伴った屋敷地などが検出されている（栗田 2003a）。

その後、和泉型瓦器椀消滅後は、編年材料となる考古資料が年代幅の大きい大型煮炊具に依存されるため、出土遺跡は認められるものの具体的な様相は明らかではない。

しかしながら、当該地域は、南北朝期の争乱から室町期の河内国守護畠山一族の争いなど、文献資料にもたびたび登場し、それらの地名も現存するものが多い。遺跡で言えば、石川右岸の西大寺山遺跡では 16 世紀前半代に廃絶する山中田城が発掘調査で確認されており（註 2）、嶽山城、金胎寺城もその所在が明らかになっているなど、文献資料の記載事項を裏付ける様相も認められる。また、16 世紀後半に富田林寺内町が成立するなど、市域における中世後半期は決して希薄な状況ではない。

ただし、石川左岸に形成されたであろう中世後半期の集落や中世前半期から後期にかけての集村化に至る地域的な様相など不明な点が多い。今次調査の成果は、こうした地域社会の空白期を埋める資料として重要な位置を占めている。（藤田）



第1図 富田林市内遺跡分布図

第2章 調査に至る経過

調査対象地は、市域西方の羽曳野丘陵と東方に北流する石川との間に形成された中位段丘の東側縁辺に立地する。調査前の状況は、西部高所から東部低所に向かい棚状に耕地（果樹園）化されていた。

平成13年11月21日に実施された事前調査（調査担当者：富田林市教育委員会文化財保護課 今西淳※平成13年度当時）により、調査対象地西部（高所）での基本層序は、1. 耕土（約0.2m）、2. 床土（約0.02m）、3. 灰褐色弱粘質土…瓦器、土師器、須恵器が混ざる（約0.2m）、4. 茶黄色弱粘質土に礫多く混じる（地山）であり、地山面と想定される第4層を切り込む形で遺構が形成されていることが確認された。また、遺物を包含する第3層上面を検出面とする溝状遺構も確認されたが、これは古くとも近世後半代から近代にかけての田畑耕作にかかわるものと判断されたため、本調査においては遺構配置を簡略に記録するに止めることとした（図版1上）。調査区東部（低所）での基本層序は、1. 耕土（約0.2m）、2. 床土（約0.5m）、3. 茶黄色弱粘質土に礫多く混じる（地山）であり、西部同様に地山上面を検出面とする遺構が確認された。

以上の成果を受け、本発掘調査は①西部分第3層上面の遺構の確認、②地山面の遺構の確認、の手順で実施することとなった（註3）。
(横山)

調査日程

10月18日（金）

調査区西部耕土・床土の重機掘削。

10月22日（火）・23日（水）

上層遺構（近世後半期～近代）検出・遺構掘削・測量・写真撮影。

10月24日（木）

調査区西部第3層、東側耕土・床土の重機掘削。

10月25日（金）

調査区西部遺構検出・検出写真撮影。

10月28日（月）～11月5日（火）

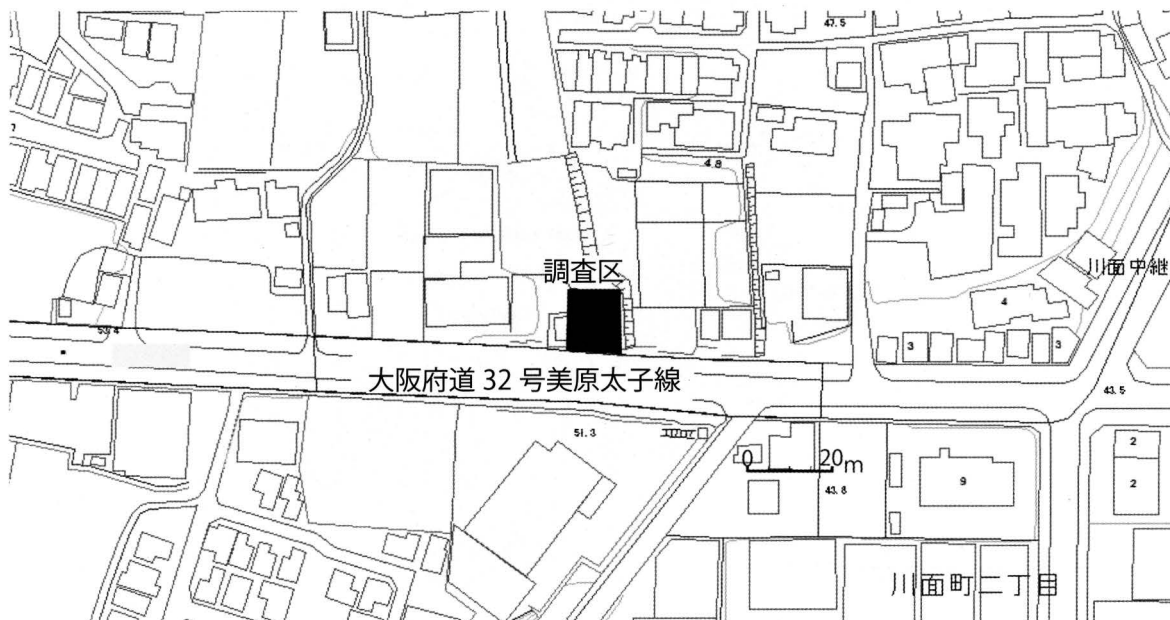
調査区西部遺構掘削・測量。

11月6日（水）・7日（木）

調査区東部遺構検出・遺構掘削・測量。

11月8日（金）

全景写真撮影・測量にて調査終了



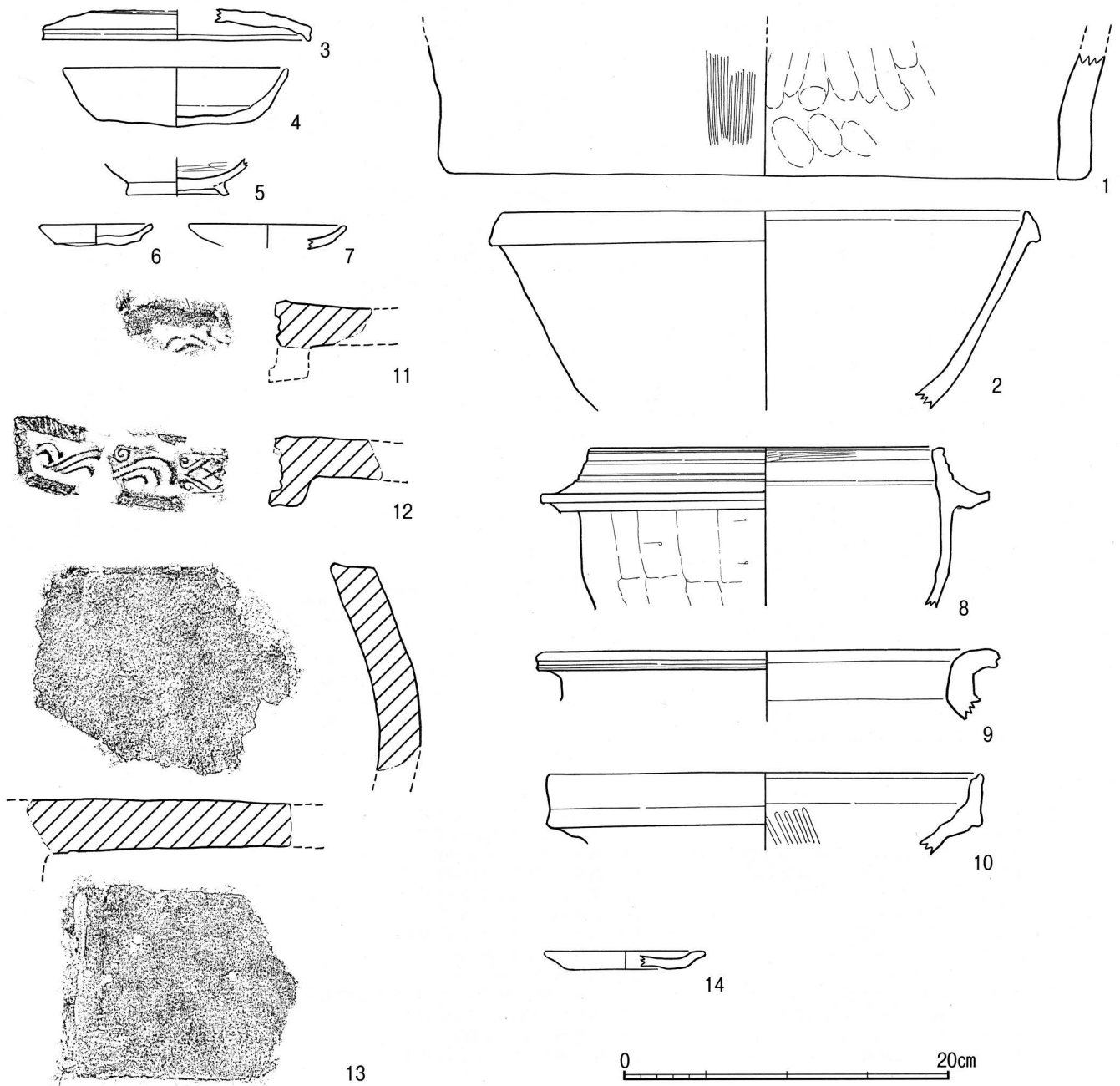
第2図 調査区位置図

第3章 調査の成果

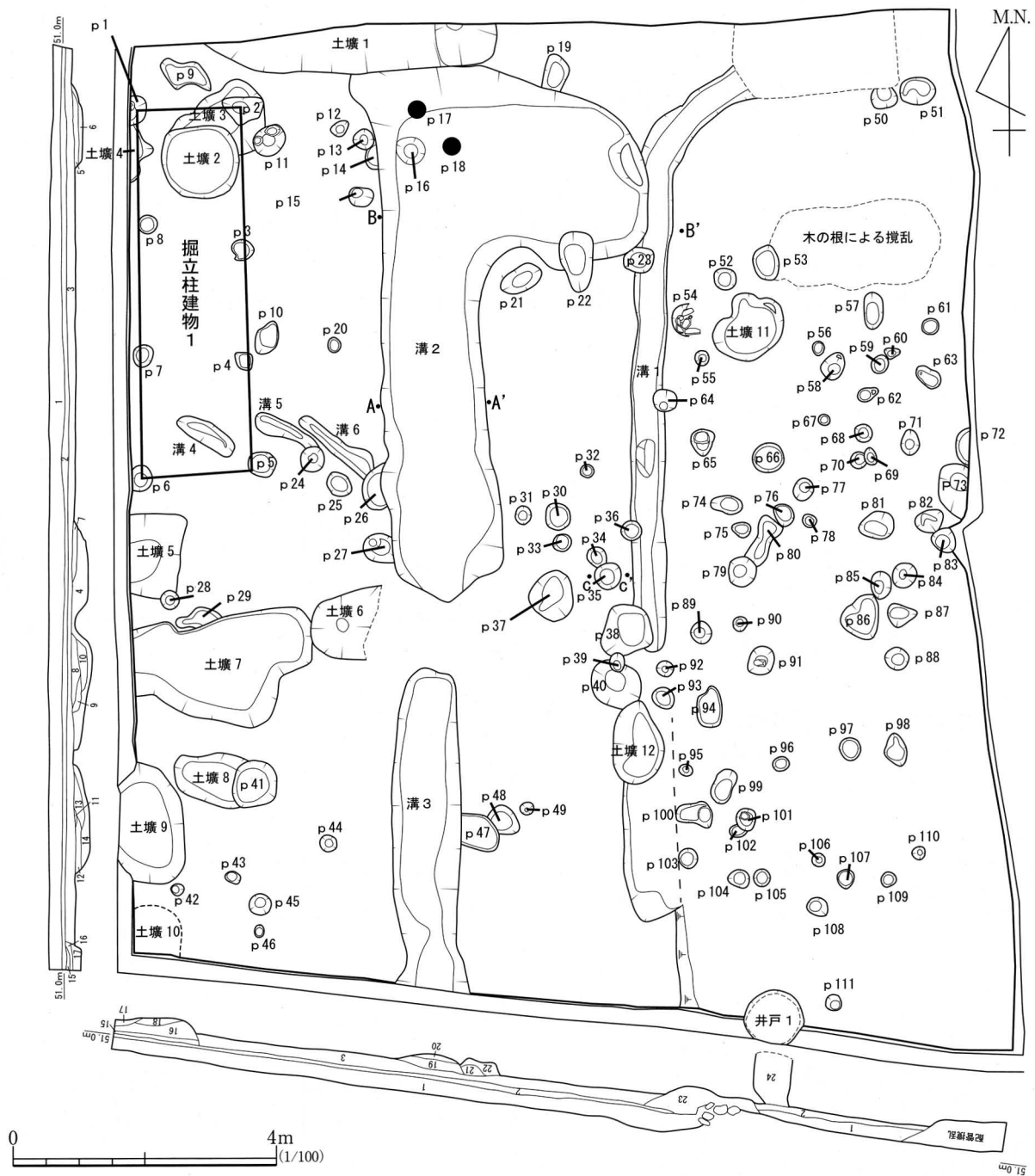
第1節 基本層序 (第4図、図版1・上、下)

調査区西部で確認された基本層序は、

1. 耕土 (層厚約 0.2m)
2. 黄灰色 (2.5Y6/1) ににぶい黄褐色 (10YR4/3) が混ざる粘質土～床土
3. 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土～遺物包含層
4. にぶい黄橙色 (10YR6/4) 粘質土に礫 (5cm～20cmφ) 多く混ざる～地山



第3図 第1層・第2層・第3層・鋤溝1出土遺物



- 1 耕土
- 2 黄灰色(2.5Y6/1)に
にぶい黄褐色(10YR4/3)混ざる粘質土~床土
- 3 褐灰色(10YR5/1)粘質土~遺物包含層
- 4 明褐色(7.5YR5/6)粘土~整地土
- 5 灰色(5Y4/1)弱粘質土
- 6 暗青灰色(5PB4/1)強粘質土
- 7 黄灰色(2.5Y5/1)強粘質土
- 8 灰色(5Y5/1)粘質土
- 9 黄灰色(2.5Y4/1)弱粘質土
- 10 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂礫土
- 11 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土
- 12 黄灰色(2.5Y4/1)砂礫土

- 13 黄灰色(2.5Y5/1)強粘質土
- 14 灰色(5Y4/1)粘性砂質土
- 15 褐灰色(10YR4/1)強粘質土
- 16 黄灰色(2.5Y4/1)砂礫土
- 17 黄灰色(2.5Y4/1)粘性砂質土
- 18 黄褐色(2.5Y5/4)粘土
- 19 黄灰色(2.5Y5/1)粘性砂質土
- 20 灰色(5Y4/1)粘性砂質土
- 21 暗灰黄色(2.5Y5/2)に
にぶい黄褐色(10YR5/3)混ざる砂質土
- 22 黄灰色(2.5Y5/1)強粘質土
- 23 石垣構築による攪乱土
- 24 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土

凡例
●は上層遺構

第4図 出土遺構平面図・断面図

表1 遺構規模および出土遺物一覧表（その1）

層・遺構名	遺構の規模 最大幅×最大長×深さ (m) 長径×短径×深さ (m) 直径×深さ (m) アンダーラインを 引いたものは未発掘	遺構 (土壇・ピット) の形状 アンダーラインを 引いたものは不完全	遺物	遺物の所属 時期	遺物の特記事項 (○+○は遺構間の接合関係を表している)	遺構の特記事項 (遺構の関係: 新←古)
耕土(LN1)	-	-	土師器、須恵器、土師質土器、須恵質土器、製塩土器、陶磁器、埴輪、平瓦	古墳時代～近世	肥前陶磁器の碗の見込みに蛇の目釉剥ぎ(18世紀後半)別の白磁碗の底部裏面に針支え痕か?	-
耕土下～床土(LN2)	-	-	土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器、瓦	奈良時代～近世	須恵器坏・身は8世紀代(実測)黒色土器Bは11世紀代か?(実測)	-
包含層(LN3)	-	-	土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、須恵質土器、瓦質土器、陶磁器、瓦、サヌカイ剥片、鉄釘	弥生時代～近世	須恵器の坏身1点は7世紀代、皿片1点は8世紀代土師器の盤は8世紀代肥前陶磁器の碗の中の2個体で、包含層(LN3)+土壇2(LN27)	-
鋤溝(LN3 LN11)	1.24×0.25×0.03	-	土師器、須恵器あるいは須恵質土器、瓦	古代以降	特になし	-
鋤溝(LN3 LN12)	5.07×0.24×0.04	-	土師器、瓦質土器	中世以降	特になし	-
鋤溝(LN3 LN13)	7.71×0.27×0.04	-	土師器、陶器、瓦	近世	特になし	-
浅い落ち込み(LN3 LN14)	0.98×0.88×0.11	隅丸方形	須恵器	古墳時代～古代	特になし	-
鋤溝(LN3 LN15)	1.05×0.23×0.03	-	土師器	近世	特になし	-
鋤溝(LN3 LN16)	1.48×0.25×0.02	-	土師器	不明	特になし	-
浅い落ち込み(LN3 LN17)	1.87×1.21×0.04	四角形	土師器、磁器、製塩土器?	古代～近世	特になし	-
鋤溝(LN3 LN18)	4.5×0.23×0.04	-	土師器	不明	特になし	-
鋤溝(LN3 LN19)	4.08×0.3×0.03	-	土師質土器	近世	特になし	-
鋤溝(LN3 LN20)	2.64×0.23×0.05	-	土師器	不明	特になし	-
溝1 (南部:LN46) (中央部:LN47) (北部:LN48)	8.9×0.5×0.4	-	土師器、須恵器、黒色土器、土師質土器、瓦質土器、陶器、瓦	古代～中世	甕体部のうち1点には外面に自然釉がべっとり付着陶器の中におそらく包含層(LN3)+溝1南部(LN46)溝1中央部(LN47)+溝1北部(LN48)溝1中央部(LN47)+溝1北部(LN48)溝1北部(LN48)+溝2(LN30-1)+溝2北東部(LN30-2)	P39←土壇12←P40←溝1 P28, P36, P38, P64, P92, P93←溝1
溝2 (LN24)(LN26) (LN30-1) (北東部:LN30-2)	8.2×1.5×0.4	-	土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、須恵質土器、陶磁器、丸瓦、平瓦、サヌカイ製削器、2次調整のあるサヌカイ製削片、焼けた砂岩	中世～近世	溝2(LN30-1)+溝2北東部(LN30-2)、溝1(LN48)+溝2北東部(LN30-1)+溝2(LN30-2)新堂廃寺と同じ造瓦道具で造られた瓦出土(平瓦Ⅲ2 J2as群、平瓦Ⅲ2 J2ar群、平瓦Ⅲ2 J2ag群)	土壇1←溝2 P17, P18←溝2, P22←溝2 溝2←P14, P16, P19, P27 溝2←P26←溝6
溝3(LN29)	5.9×1.6×0.2	-	土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、瓦質土器片5点、陶磁器、平瓦、丸瓦、砂石。	古代～近世	特になし	溝3←P47←P48
溝4	0.97×0.33×0.05	-	出土遺物なし	-	-	-
溝5	0.98×0.29×0.05	-	出土遺物なし	-	-	P24←溝5
溝6	1.46×0.36×0.03	-	出土遺物なし	-	-	溝2←P26←溝6
土壇1(LN31)	4.5×0.75×0.2	半楕円形	土師器、須恵器、瓦質土器、磁器、平瓦	中世～近世	特になし	土壇1←溝2
土壇2(LN27)	1.7×0.19	円形	瓦質土器、土師質土器、陶磁器、丸瓦	中世～近世	おそらく土壇2(LN27)+木の根による攪乱穴(LN56)、おそらく土壇2(LN27)+包含層(LN3)実測した丸瓦は近世瓦	土壇2←土壇3
土壇3(LN51)	1.25×0.65×0.04	不整形	土師器	不明	特になし	土壇2←土壇3 P11←土壇3 建物1[P2]←土壇3
土壇4	0.88×0.36×0.14	不整形	出土遺物なし	-	-	建物1[P1]←土壇4
土壇5(LN32)	1.31×0.75×0.12	ほぼ方形	土師器、須恵器	古代	特になし	-
土壇6(LN36)	1.5×0.95×0.21	半円形	土師器、焼土塊	古代～中世か?	特になし	-
土壇7(LN33)	2.68×1.72×0.07	不整形	土師器、須恵器、磁器、丸瓦、平瓦、木片	古代～近世	伊万里小壺は耕土下～床土(LN2)+土壇7(LN33)で接合。底部が土壇7(LN33)、体部～口縁部が耕土下～床土(LN2)	土壇7←P29
土壇8(LN34)	0.9×0.8×0.2	ほぼ楕円形	土師器、須恵器、磁器	古代・近世	特になし	P41←土壇8

表1 遺構規模および出土遺物一覧表（その2）

層・遺構名	遺構の規模 最大幅×最大長×深さ (m) 長径×短径×深さ (m) 直径×深さ (m) アンダーラインを 引いたものは未完掘	遺構 (土壌・ピット) の形状 アンダーラインを 引いたものは不完全	遺物	遺物の所属 時期	遺物の特記事項 (○+○は遺構間の接合関係を表している)	遺構の特記事項 (遺構の関係: 新←古)
土壌9(LN21)	1.88× <u>1.1</u> ×0.25	ほぼ楕円形	土師器、瓦器、土師質土器、須 恵質土器、青磁、陶器、丸瓦	中世～近世	特になし	ただし上層部分で出土 (断面LN11・LN12)
土壌10(LN35)	<u>0.73</u> × <u>0.71</u> ×0.2	扇形	土師器	不明	特になし	-
土壌11(LN57)	1.14×1.3×0.35	不整形	土師器、須恵器、土師質土器、 陶器、丸瓦、平瓦、丸瓦	古代・近世	特になし	-
土壌12(LN45)	1.28×0.78×0.16	不整形	土師器、須恵器、瓦質土器、平 瓦、焼土塊	古代～中世	土壌12(LN45)+包含層(LN3)	土壌12←P40
建物1[P1] (LN49)	0.45× <u>0.25</u> ×0.11	半四角形	土師器、磁器	近世	特になし	建物1 [P 1] ←土壌4
建物1[P2] (LN52)	0.6×0.42×0.16	不整形	出土遺物なし	-	-	建物1 [P 2] ←土壌3
建物1[P3]	0.32×0.1	勾玉形	出土遺物なし	-	-	-
建物1[P4] (LN53)	0.25×0.25×0.05	ほぼ四角形	土師器、須恵器	古代以降	特になし	-
建物1[P5]	0.41×0.1	円形	出土遺物なし	-	-	-
建物1[P6]	0.4×0.17	円形	出土遺物なし	-	-	-
建物1[P7]	0.4×0.17	円形	瓦器	中世	特になし	-
建物1[P8] (LN50)	0.34×0.16	円形	出土遺物なし	-	-	-
P9	0.83×0.5×0.03	不整形	出土遺物なし	-	-	-
P10	0.52×0.64×0.052	不整形	出土遺物なし	-	-	-
P11	0.51×0.24	円形	出土遺物なし	-	-	P11←土壌3
P12	0.28×0.144	ほぼ円形	出土遺物なし	-	-	-
P13	0.32×0.3	ほぼ円形	出土遺物なし	-	-	P13←P14
P14	0.32×0.22×0.08	楕円形	出土遺物なし	-	-	P13←P14←溝2
P15(LN23)	0.36×0.09	ほぼ円形	磁器	近世	特になし	-
P16(LN25)	0.42×0.08	円形	須恵器	古代?	特になし	溝2←P16
P17	不明	円形	出土遺物なし	-	-	P17←溝2
P18	不明	円形	出土遺物なし	-	-	P18←溝2
P19(LN55)	<u>0.52</u> ×0.37×0.12	ほぼ四角形	土師器、瓦質土器	中世	特になし	溝2←P19
P20	0.21×0.07	円形	出土遺物なし	-	-	-
P21(LN54)	0.64×0.36×0.09	楕円形	砂岩	-	-	-
P22	0.92×0.52×0.27	ほぼ楕円形	出土遺物なし	-	-	P22←溝2
P23	0.45×(不明)	ほぼ円形	出土遺物なし	-	-	P23←溝1
P24	0.35×0.08	円形	出土遺物なし	-	-	P24←溝5
P25	0.41×0.06	ほぼ円形	出土遺物なし	-	-	-
P26	0.71× <u>0.28</u> ×0.05	楕円形	出土遺物なし	-	-	溝2←P26←溝6
P27(LN37)	<u>0.45</u> ×0.43×0.25	楕円形	土師器	不明	特になし	溝2←P27
P28	0.28×0.144	円形	出土遺物なし	-	-	P28←土壌5
P29	0.71× <u>0.28</u> ×0.1	不整形	出土遺物なし	-	-	土壌7←P29
P30(LN39)	0.42×0.36×0.02	楕円形	土師器、須恵器	古代?	特になし	-
P31(LN38)	0.23×0.14	円形	土師器	古代?	特になし	-
P32	0.21×0.12	円形	出土遺物なし	-	-	-
P33	0.28×0.06	円形	出土遺物なし	-	-	-
P34	0.38×0.04	ほぼ円形	出土遺物なし	-	-	P35←P34
P35(LN28)	0.41×0.25	円形	土師器、磁器、丸瓦、平瓦、鉄 釘、古銭(寛永通宝)、流紋岩 製砥石	近世	瓦・伊万里茶碗からみて18世紀後半～ 19世紀 出土した平瓦はすべて同じタイプ	P35←P34 遺構の時期も近世に限 定できる
P36(LN40)	0.31×0.13	円形	土師器、平瓦	-	特になし	-

表1 遺構規模および出土遺物一覧表（その3）

層・遺構名	遺構の規模 最大幅×最大長×深さ (m) 長径×短径×深さ (m) 直径×深さ (m) アンダーラインを 引いたものは未完掘	遺構 (土塋・ピット) の形状 アンダーラインを 引いたものは不完全	遺物	遺物の所属 時期	遺物の特記事項 (○+○は遺構間の接合関係を表している)	遺構の特記事項 (遺構の関係:新←古)
P37(LN41) (LN22)	0.76×0.70×0.19	不整形	土師器、須恵器、黒色土器、瓦質土器、須恵質土器、陶磁器、丸瓦、平瓦、埴、サヌカイ石核・剥片、凝灰岩、不明石	弥生・古代 ～近世	包含層(LN3)+Pit37(LN22)(陶器皿) 確実に古代の土器を含む	LN22の下層
P38(LN42)	0.88×0.72×0.21	不整形	土師器、須恵器、瓦質土器、磁器、平瓦	古代～近世	特になし	-
P39(LN43)	0.22×0.05	円形	平瓦	中世	特になし	P39←P38, P40
P40(LN44)	0.75×0.12	ほぼ円形	土師器、瓦質土器、土師質土器、磁器	中世～近世	特になし	土塋12, P39←P40
P41	0.78×0.2	ほぼ円形	出土遺物なし	-	-	P41←土塋8
P42	0.2×0.06	ほぼ円形	出土遺物なし	-	-	-
P43	0.24×0.17×0.08	楕円形	出土遺物なし	-	-	-
P44	0.25×0.06	円形	出土遺物なし	-	-	-
P45	0.33×0.14	円形	出土遺物なし	-	-	-
P46	0.19×0.14×0.1	楕円形	出土遺物なし	-	-	-
P47	0.6×0.51×0.02	不整形	出土遺物なし	-	-	溝3←P47←P48
P48	0.49×0.33×0.06	不整形	出土遺物なし	-	-	溝3←P47←P48
P49	0.2×0.37	円形	出土遺物なし	-	-	-
P50	0.39×0.11	ほぼ円形	出土遺物なし	-	-	-
P51	0.54×0.42×0.08	楕円形	出土遺物なし	-	-	-
P52	0.32×0.12	円形	出土遺物なし	-	-	-
P53	0.52×0.38×0.29	楕円形	出土遺物なし	-	-	P53←木の根による攪乱穴
P54	0.5×0.42×0.64	半円形	石(取りあげなし)	-	-	-
P55	0.22×0.11	円形	出土遺物なし	-	-	-
P56	0.22×0.06	ほぼ円形	出土遺物なし	-	-	-
P57	0.56×0.28×0.12	楕円形	出土遺物なし	-	-	-
P58	0.44×0.34×0.42	ほぼ楕円形	出土遺物なし	-	-	-
P59	0.25×0.11	円形	出土遺物なし	-	-	-
P60	0.23×0.18×0.09	三角形	出土遺物なし	-	-	-
P61	0.26×0.1	円形	出土遺物なし	-	-	-
P62	0.33×0.21×(不明)	ほぼ楕円形	出土遺物なし	-	-	-
P63(LN58)	0.42×0.27×0.11	ほぼ楕円形	瓦質土器	中世	特になし	P64←溝1
P64(LN63)	0.36×0.56	ほぼ円形	磁器	近代	特になし	-
P65	0.42×0.38×0.16	三角形	石(取りあげなし)	-	-	-
P66	0.48×0.4	円形	出土遺物なし	-	-	-
P67	0.18×0.04	円形	出土遺物なし	-	-	-
P68	0.26×0.17	円形	出土遺物なし	-	-	-
P69	0.28×0.18×0.08	楕円形	出土遺物なし	-	-	P69←P70
P70(LN61)	0.24×0.1	円形	土師器	近世	特になし	-
P71(LN60)	0.4×0.3×0.3	ほぼ楕円形	土師器	不明	特になし	P69←P70
P72(LN59)	0.58×0.22×0.16	半円形	土師質土器、平瓦、道具瓦	近世	特になし	-
P73(LN62)	0.75×0.43×0.24	ほぼ半円形	土師器、土師質土器	近世	特になし	-
P74	0.51×0.23×0.04	ほぼ楕円形	出土遺物なし	-	-	-
P75	0.28×0.23×0.07	不整形	出土遺物なし	-	-	-
P76	0.38×0.28×0.12	楕円形	出土遺物なし	-	-	-
P77	0.35×0.08	ほぼ円形	出土遺物なし	-	-	-

表1 遺構規模および出土遺物一覧表（その4）

層・遺構名	遺構の規模 最大幅×最大長×深さ (m) 長径×短径×深さ (m) 直径×深さ (m) アンダーラインを 引いたものは未完掘	遺構 (土壌・ピット) の形状 アンダーラインを 引いたものは不完全	遺物	遺物の所属 時期	遺物の特記事項 (○+○は遺構間の接合関係を表している)	遺構の特記事項 (遺構の関係: 新←古)
P78(LN67)	2.2×0.07	円形	土師器	不明	特になし	-
P79	0.41×0.37	円形	出土遺物なし	-	-	-
P80	0.69×0.48×0.09	瓢箪形	出土遺物なし	-	-	P79←P80
P81	0.51×0.41×0.16	不整形	出土遺物なし	-	-	-
P82	0.45×0.25×0.13	楕円形	出土遺物なし	-	-	-
P83(LN69)	0.36×0.17	ほぼ円形	土師器、瓦質土器	近世	特になし	-
P84	0.36×0.29	円形	出土遺物なし	-	-	-
P85(LN68)	0.43×0.31×0.06	楕円形	土師器	近世	特になし	-
P86	0.68×0.57×0.2	不整形	出土遺物なし	-	-	-
P87	0.44×0.35×0.2	不整形	出土遺物なし	-	-	-
P88	0.36×0.54	円形	出土遺物なし	-	-	-
P89(LN64)	0.32×0.27	円形	土師器、黒色土器、土師質土器	近世	特になし	-
P90(LN65)	0.22×0.09	円形	土師器、鉄釘	不明	特になし	-
P91(LN66)	0.42×0.25	ほぼ円形	土師器、壁土	不明	特になし	-
P92	0.2×0.04	円形	出土遺物なし	-	-	-
P93	0.35×0.1	円形	出土遺物なし	-	-	-
P94	0.63×0.38×0.18	不整形	出土遺物なし	-	-	-
P95	0.21×0.09	円形	出土遺物なし	-	-	-
P96	0.24×0.14	円形	出土遺物なし	-	-	-
P97	0.31×0.14	円形	出土遺物なし	-	-	-
P98(LN70)	0.5×0.34×0.12	不整形	土師器	近世?	特になし	-
P99(LN71)	0.56×0.36×0.08	ほぼ楕円形	土師器	不明	特になし	-
P100(LN100)	0.55×0.4×0.16	不整形	土師器	不明	特になし	-
P101	0.35× (不明)	ほぼ円形	出土遺物なし	-	-	P101←P102
P102	0.2×0.57	ほぼ円形	出土遺物なし	-	-	P101←P102
P103(LN73)	0.3×0.19	円形	瓦器	中世	特になし	-
P104	0.33×0.1	ほぼ円形	出土遺物なし	-	-	-
P105	0.26×0.45	円形	出土遺物なし	-	-	-
P106	0.2×0.07	円形	出土遺物なし	-	-	-
P107	0.26×0.09	ほぼ円形	出土遺物なし	-	-	-
P108	0.31×0.1	ほぼ円形	出土遺物なし	-	-	-
P109	0.2×0.11	円形	出土遺物なし	-	-	-
P110(LN74)	0.2×0.2	円形	丸瓦	近世	特になし	-
P111	0.25×0.09	円形	出土遺物なし	-	-	-
木の根による攪乱穴 (LN56)	2.59×1.32×0.45	不整形	土師器、須恵器、黒色土器?、瓦質土器、土師質土器、陶磁器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦、不明石	古代～近世	磁器のなかに木の根による攪乱穴 (LN56)+土壌2 (LN27) で接合する可能性の高いものがある。	P53←木の根による攪乱穴
井戸	0.8×未完掘	円形	出土遺物なし	-	-	-

である。また、調査区東部は耕地化に伴う削平を受けており、第2層下が第4層（地山）となっている。

なお、3層上面では鋤溝・浅い落ち込みなどを検出している（表1）。 （横山）

第2節 遺構

ここでは地山面にて検出された遺構につき記述する（図版1下、図版5上）。

遺構は、調査区の全面にわたって検出されている。主たる遺構の種別としては、Pit、溝、土壇、井戸が挙げられる。以下に遺構別にその特徴を記す（表1）。

【溝】

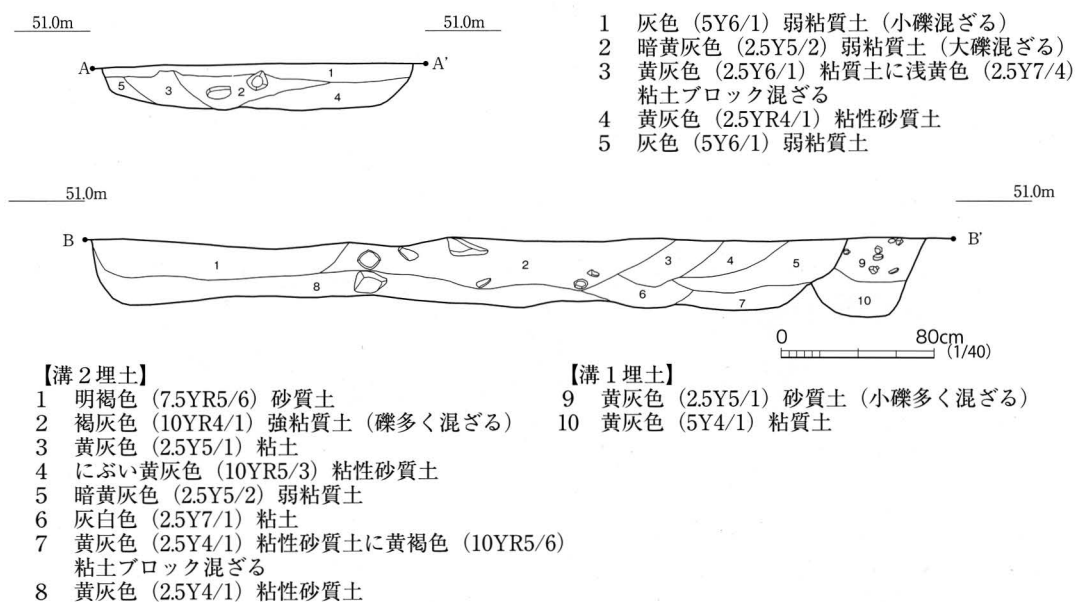
6条が検出されている。この内注目されるのは、調査区中央を南北方向に走る溝1と溝2・3である。溝2は溝1を切り込んで設けられており（第5図）、先後関係は明白である。

○溝1（図版4上）

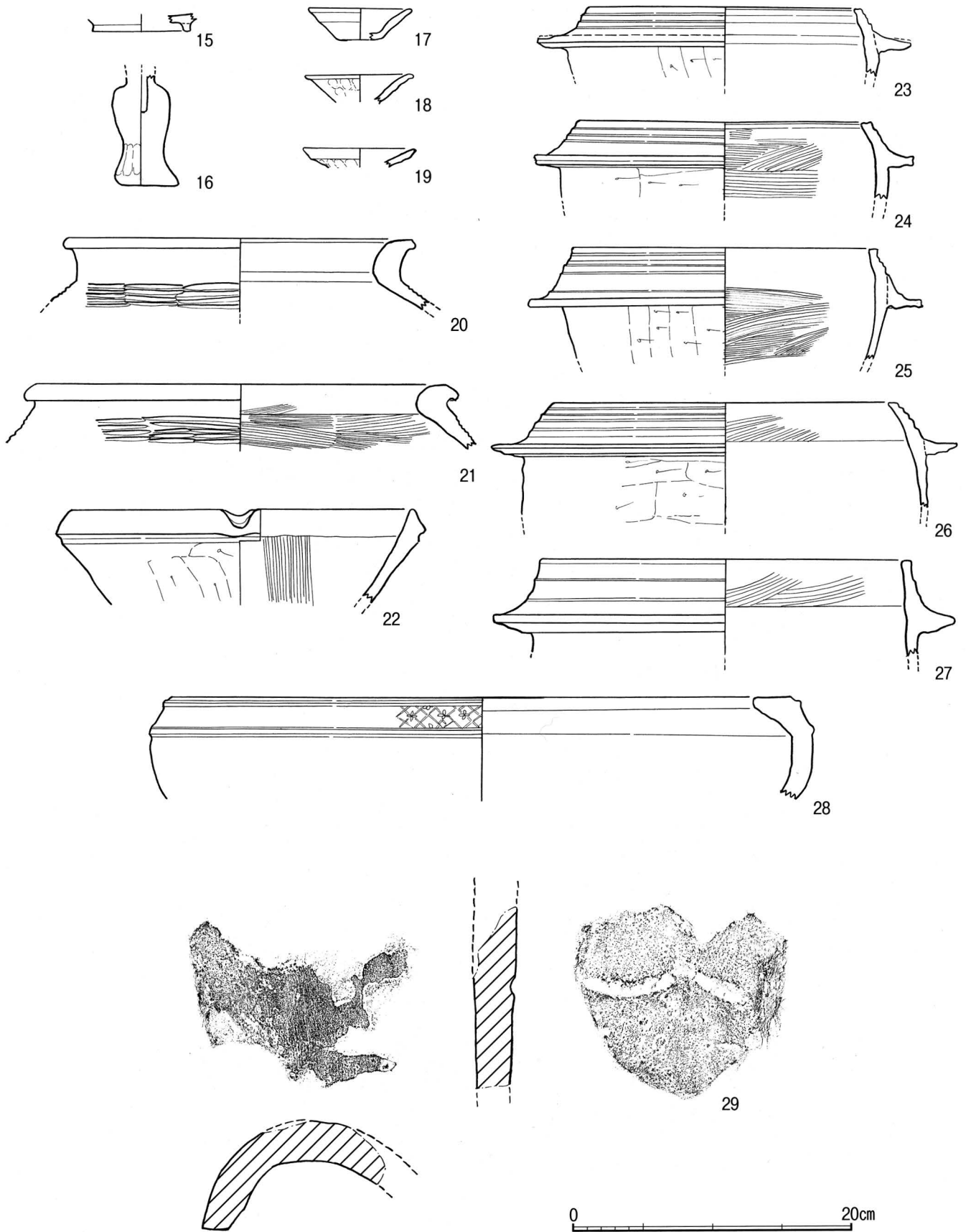
溝1は幅約0.5m、深さが最深部で約0.4mを測る。溝の断面形態は逆台形を呈する。この溝は、調査区中央部では南北にほぼ直進するが、北部において北東方向に弧状に屈曲している。その延長部分は上層からの攪乱により破壊されているが、調査区北東端部では確認されていないため、攪乱部内で収束するものと推測される。また南部については後世に削平を受けているため溝底面が部分的にかろうじて遺存する状態であり、南方への延長範囲については判断不能である。

当遺構の機能については、硬く締まった埋土の状態から水路としての用途は考えがたく、屋敷地を区画する板塀等の施設に付随するものと想定されるが、溝底および溝脇に規則的な支柱穴等は確認されておらず、特定できない。

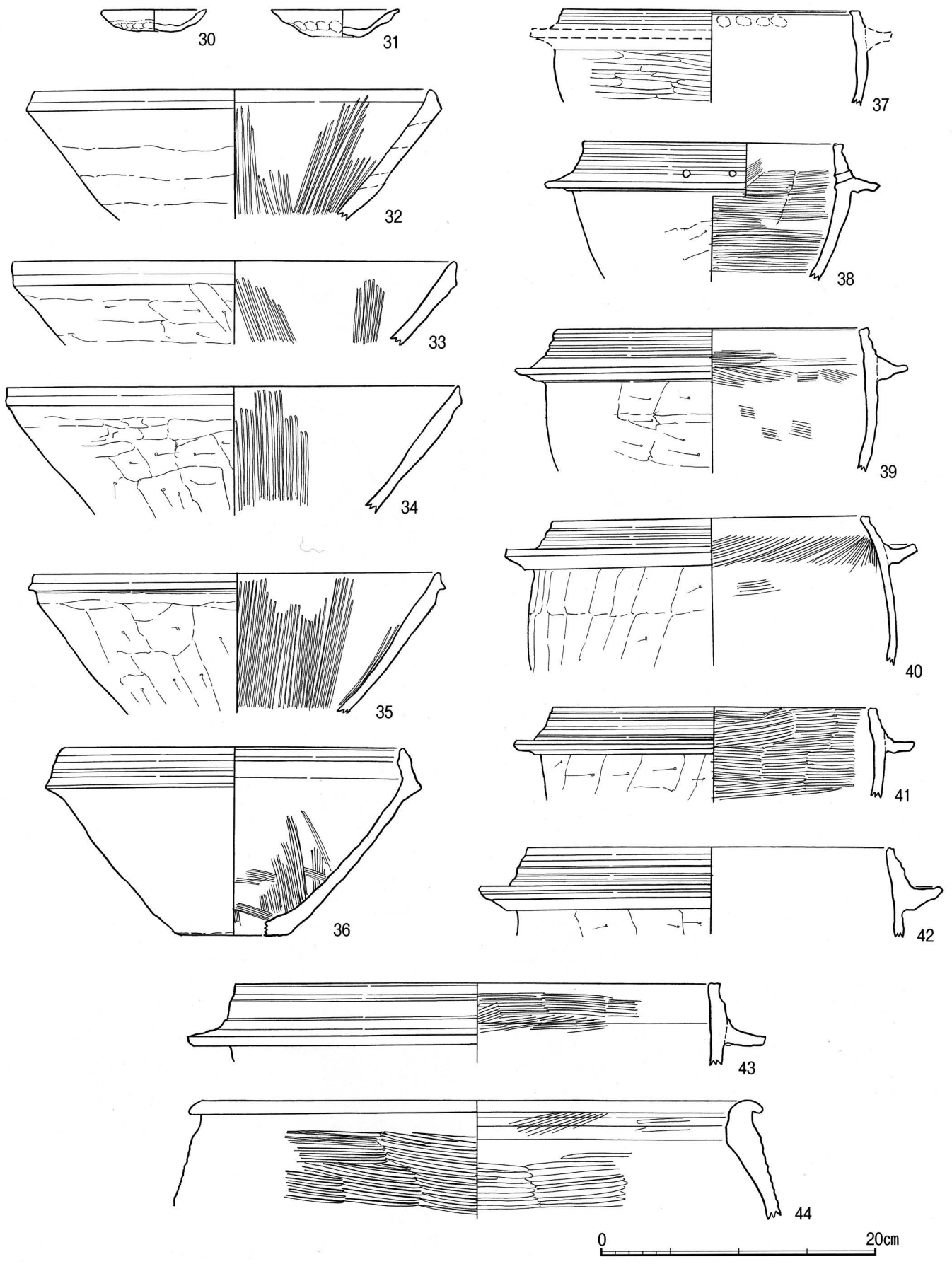
埋土からは土師器、須恵器、瓦質土器、瓦等多様な遺物が出土している。遺物の所属時期に関しては、古代に属するものもあるが中世が主体であり、埋没時期を窺い知ることができる。



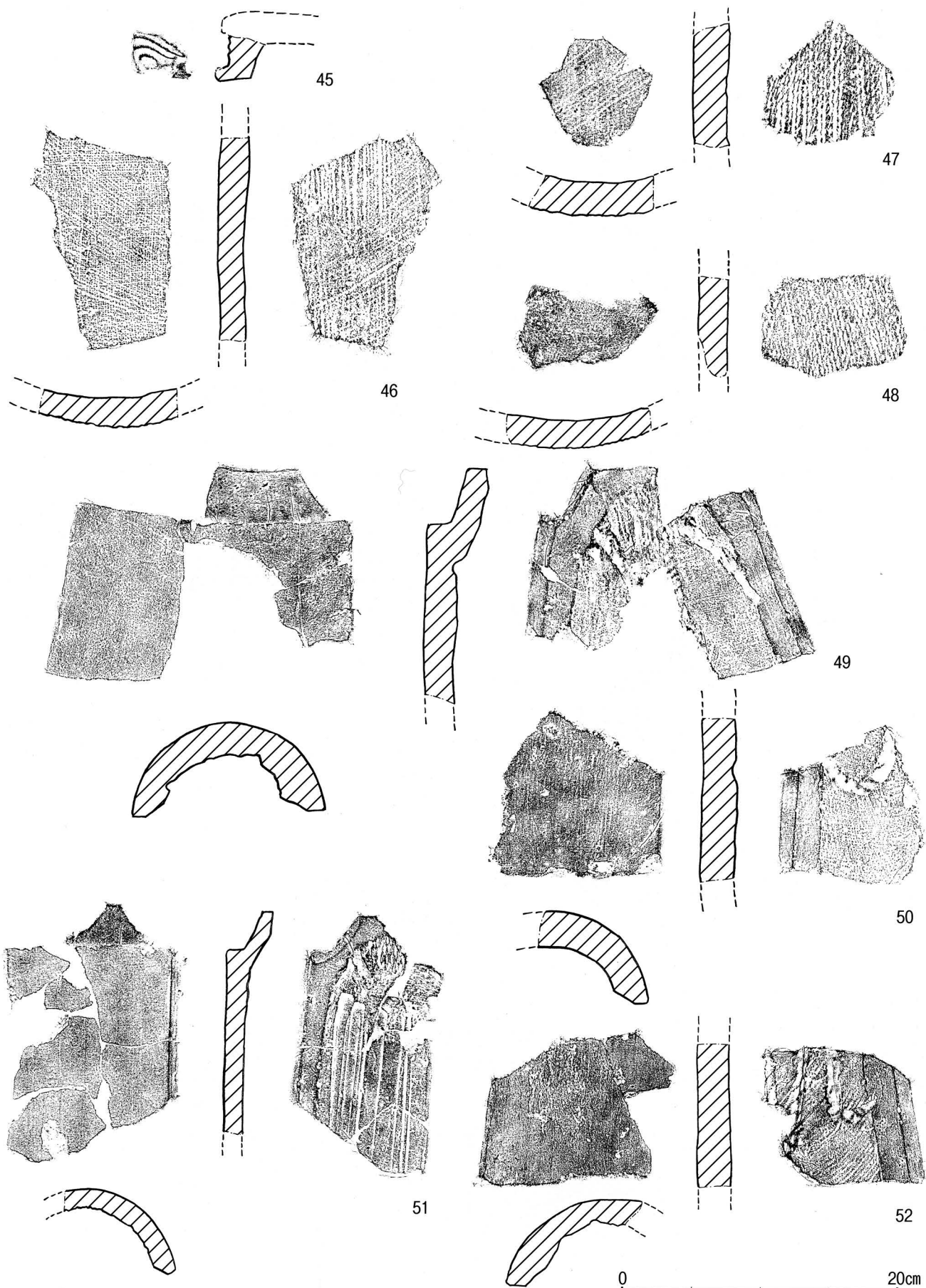
第5図 溝1・溝2断面図



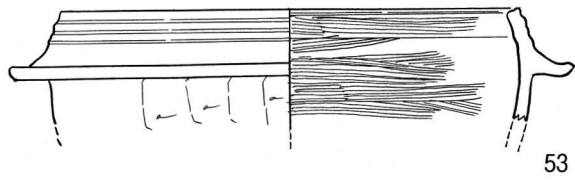
第6図 溝1出土遺物



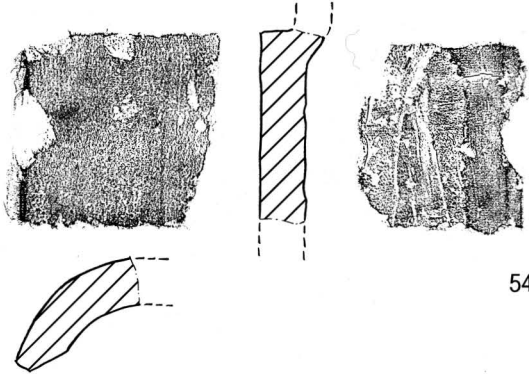
第7図 溝2出土遺物



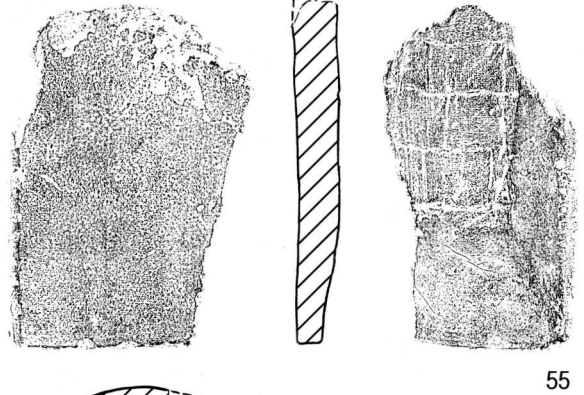
第8图 沟2出土遗物



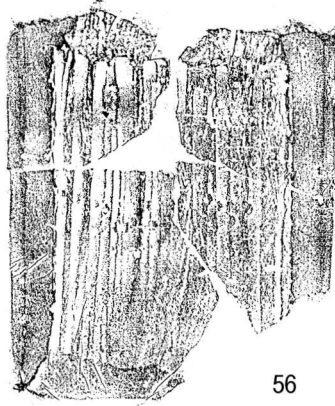
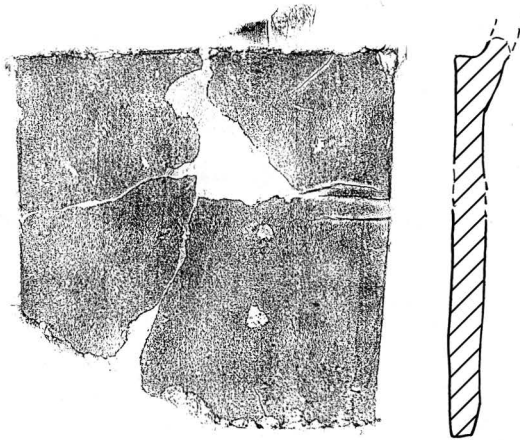
53



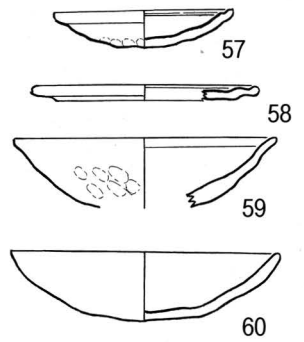
54



55



56

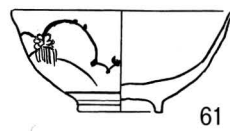


57

58

59

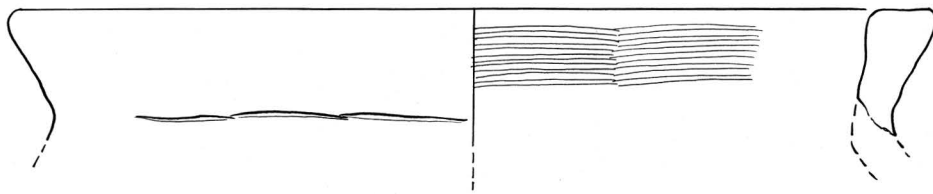
60



61



62



63



第9図 土壙1・土壙2・土壙6・土壙7・土壙11 出土遺物

○溝2（図版2下、図版3上・下）

溝1の西に隣接し、同じく南北に走る幅広の溝を確認した。規模は幅約1.5m、東方屈曲部幅約2.5m、深さ約0.4mを測る。溝1同様その北端部において東方向に短く屈曲している。

溝1と形状的に類似しているが、幅広であり埋土に砂礫が多く含まれる点において異なり、屋敷地を区画する素掘りの溝であった可能性が指摘される。また土層断面（第5図）から複数回の掘り直しが看取され、長期間機能していたことが窺える。

所属時期に関しては、東端部が溝1埋土を切り込むため、溝1に後出することは確実である。埋土からは、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、瓦など多量の遺物が出土している。これらの遺物の示す時期は中世（室町期）から近世であり、前述した長期の機能を裏付けている。なお、溝底面からは羽釜を含む大型の瓦質土器類が廃棄された状態で出土している（図版2下）。

○溝3

溝2の南方に確認された溝である。上部が削平されているために溝1に比してやや幅狭（幅約1m）となっているが、位置と埋土の性質から両者は同一遺構と判断して良い。出土遺物の内容も溝2と同様である。ただし溝1との空閑部分に関しては、底面高の関係から削平による消滅とは考えられず、掘削当初より意図的に陸橋状に掘り残したものと判断される。屋敷地への入り口等の性格を有していたのであろう。

【土壌】

総12基を検出した。

調査区北西端部において検出した土壌1は調査区外に広がるものであり、その南端部を確認したに過ぎないが、現状で最大長4.5mを測る。東端部は2段掘り状に落ち込んでいるが、一連の遺構と判断した。当遺構は溝1を切り込んで形成されている。

埋土からは土師器、須恵器、瓦質土器、磁器等が出土しているが、溝2の存続時期から近世末以降のものと推測される。

【掘立柱建物】

調査区北西部において、現状で南北方向に1間×3間に復元される掘立柱建物（掘立柱建物1）を確認した。柱穴（Pit）埋土からは近世磁器が出土している。なお、当建物は調査区北方または西方に拡大する可能性を残す。

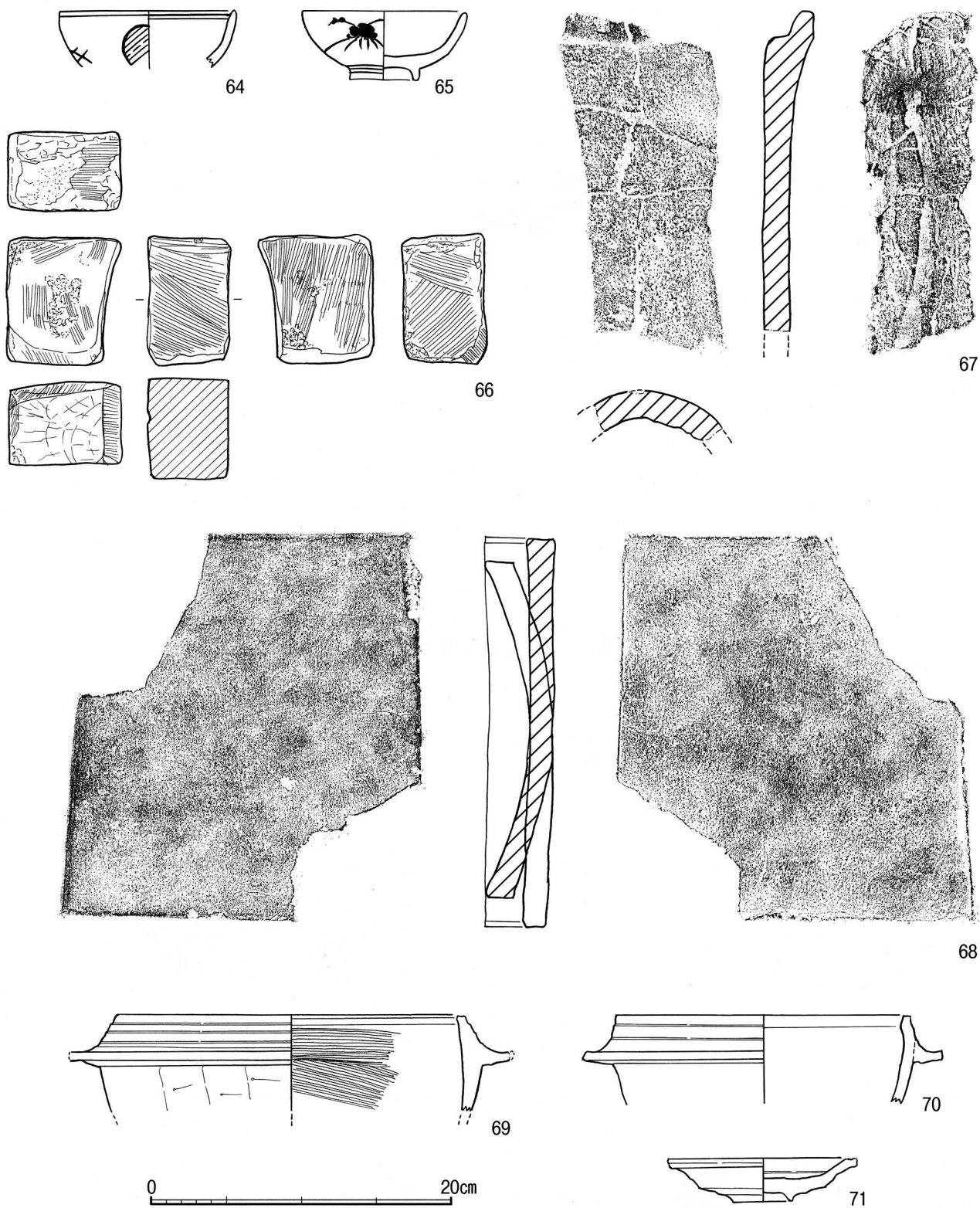
【Pit群】

調査区の主に東部において多数のPitを確認したが、明確な並びを示しておらず、建物を復元するには至っていない。検出したPit総数は111基である。

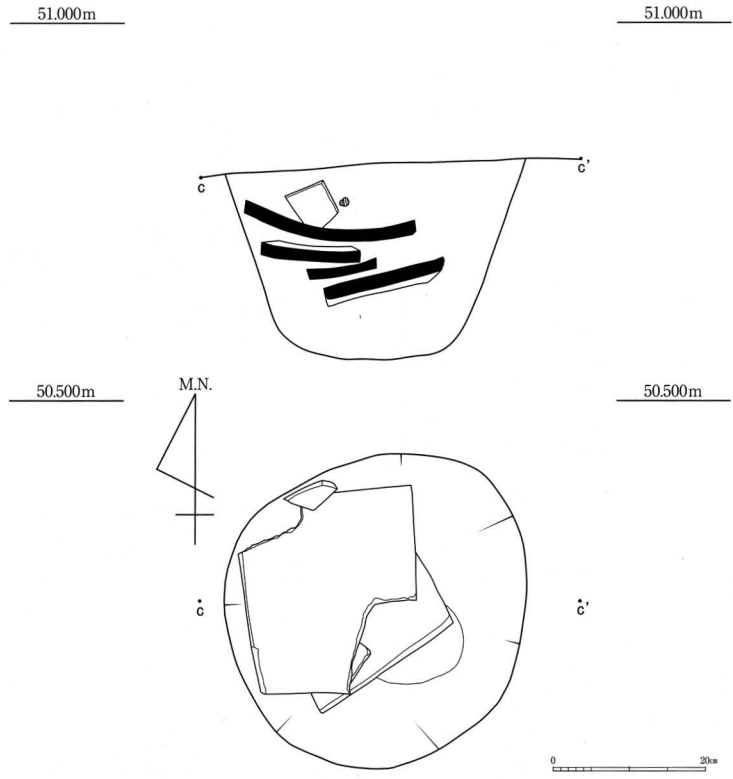
遺物を含むPitは少ないが、Pit35は意図的に廃棄されたと見られる状態で遺物が出土している（第11図・図版2上）。遺物は土師器、磁器、丸瓦、平瓦、鉄釘、古銭（寛永通宝）、砥石と多様である。磁器は18世紀後半から19世紀に該当する。Pit37は大型で径約0.7mを測る。埋土からは土師器、須恵器、黒色土器のほか、瓦質土器や陶磁器、丸瓦、平瓦、塼なども出土している。第3層からの掘り込みと重複する位置にあたるため、中近世の遺物は上層遺構の掘り残しとも考えられ、古代に所属する可能性が残る。

【井戸】

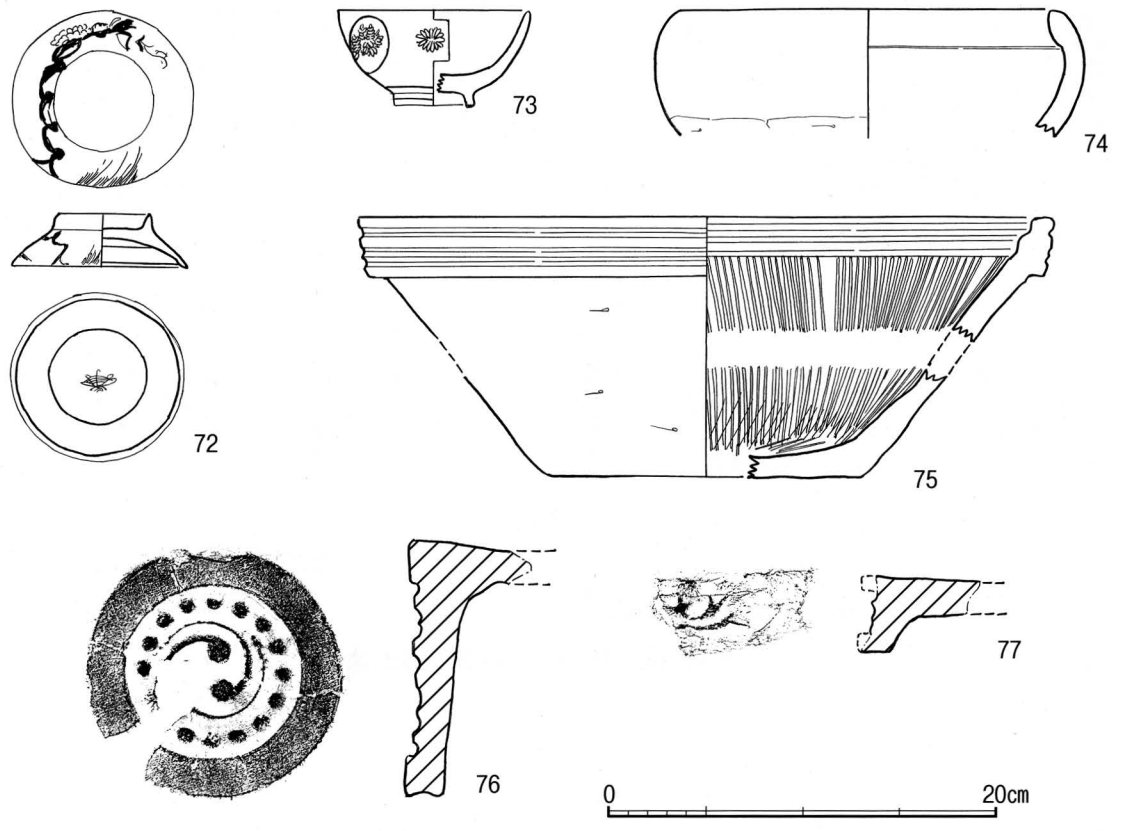
調査区東部の南壁際に井戸（井戸1）を検出した（図版4下）。直径約0.8mの素掘りの井戸である。壁面を拡張する形で掘削を進めたが、検出面下約0.8m地点で地山土の崩落が激化したため完掘を



第 10 図 Pit35・Pit36 出土遺物



第 11 図 Pit35 平面図・断面図



第 12 図 木の根による攪乱穴出土遺物

断念した。

本稿では屋敷地に付随する井戸として報告するが、調査区東部は削平により基本層序第3層が欠落するため、層的に調査区西部の地山面で確認される遺構と同等には扱えない。後の土地利用を考えると野壺穴等の可能性も想定できよう。掘削範囲においては小破片も含め遺物は一切出土していない。(横山)

第3節 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、遺物整理箱(59×38.5×14.0cm)に約20箱ある。遺物の内訳は土器、磁器などの容器類、瓦類、鉄釘、古銭などの金属類、サヌカイト製の剥片と石核、流文岩製の砥石などの石器類、そして1点ではあるが、埴輪が出土している。それぞれの遺物の堆積層および遺構からの出土状況とその所属時期は表1に示した通りである。

出土遺物のなかで、最も出土量の多い容器類には、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、須恵質土器、瓦質土器、土師質土器、陶器、磁器、製塩土器などがあり、その所属時期も古墳時代から近代にまでおよぶ。ただし出土量の多いのは中世後半期から近世にかけてのものである。また、全体形が分かる陶磁器類が数点、瓦質土器の羽釜に比較的残りのいいものがみられるが、出土遺物の大半は、小さな破片で占められている。

図化できた出土遺物は、第1節の基本層序と第2節の遺構のところに図示したが(第3図、第6図～第9図、第10図、第12図)、それらの個別の法量、形態的特徴、技術的特徴については、後で示す表2とした観察表に記している。ここではそれぞれの材質別の型式ごとに、出土遺物の傾向について述べる。

【容器類(土器・陶磁器)】

これらの容器類を所属時期ごとにみていくと、最も古い時期のものは、7世紀代の須恵器と土師器がある。ただし出土量はきわめて少ない。須恵器の坏身が包含層(LN3)から、土師器の高坏脚柱部が溝1(LN48)、溝3(LN29)から出土している。各遺構、包含層からそれぞれ1点ずつの確認である。須恵器の坏身は口径10cm前後で、退化した立ち上がりは折り込み技法で作られ、大きく内傾する。完形品での出土がないため器高は不明である。これらの特徴を陶邑編年でみればⅢ型式1段階のTG206号窯の時期に該当し、7世紀中頃の時期が当てられる。土師器の高坏は脚柱部だけが確認できる。脚柱基部径が3.5cm前後で、外面に0.8cm程度の幅で面取りが施され、内面に絞り目が残る特徴がある。土師器の都城の型式編年でみれば、飛鳥Ⅱ期に該当し、須恵器と同じく7世紀中頃の時期が当てられる。

次に7世紀末～8世紀代の須恵器が認められる。やはり量的には少ない。須恵器は蓋坏がある。坏蓋は天井部中央につまみのつくもので、耕土下～床土(LN2)からの出土である(第3図-3)。つまみ部は欠失して出土していないが、口縁部の状況からみて、扁平な擬宝珠状の形状のつまみが貼り付けられていたと推測できる。坏身は高台をもつものと、丸みをもつ平底のものがある。前者は溝3(LN29)、後者は耕土(LN1)、耕土下～床土(LN2)(第3図-4)、土壇7(LN33)から出土している。各1点ずつの出土である。高台をもつ坏身の高台径は13cm程度で、坏底部の端部に高台が貼り付けられている。平底の坏身は底部と体部の境目が屈曲するものではなく、丸みをもつため不明瞭である。これらの蓋坏の特徴からみて、平城Ⅰ期に該当し、8世紀初頭の時期が当

てられる。この時期の土師器も存在したと推測できるが、残りが悪く、確実に同時期と同定できるものは分からなかった。ただし、この時期所属としても可能なものが溝3 (LN29) と Pit38 (LN42) から出土している。ともに長胴の罌釜の罌部片である。生駒西麓に産出する角閃石を多く含む茶褐色の粘土を使用して製作されたとものである。ただし、6世紀末、あるいは7世紀初頭くらいからあるが、9世紀くらいまでほとんど形態も変わらないため、罌部の出土だけでは時期の確定は難しい。

次の時期のものとしては黒色土器と土師器がある。11～12世紀までの時期を想定できる。やはり全体的にみて、その量は少ない。黒色土器は、溝1 (LN48) (第6図-15)、Pit37 (LN22)、Pit89 (LN64) から椀が出土している。おのおの1点ずつの出土で、すべて小破片である。図示したものは黒色土器Bであるが、ほかの2点は黒色土器Aである。土師器は土壙6 (LN36) から出土した小皿2点 (第9図-57、58) と坏2点 (第9図-59、60) がある。他の遺構からも出土しているかも知れないが、全体形のわかるものがほとんどなく、確定できない。坏、小皿はともに手づくね成形で、体部から底部にかけての外面には指頭圧痕跡が明瞭に残る。小皿 (第9図-58) は11世紀に盛行したコースター状の形態をもつものである。

次に黒色土器Bに続くと考えられる瓦器椀が1点 (第3図-5)、耕土下～床土 (LN 2) から出土している。断面が長方形の高台で、瓦器椀としては比較的古い様相を呈していること、見込みにかすかであるが暗文が施されているのが観察できることから、12世紀前後の時期が想定できる。ほかにも溝3 (LN29) から2点、土壙9 (LN21)、Pit15 (LN23)、Pit103 (LN73) から1点ずつ瓦器椀が出土しているが、高台部分が欠失しているため、この瓦器椀と同じ時期のものか、この後の新しい時期のものなのか判定できない。

次に13世紀後半～16世紀に所属する土師器、土師質土器、須恵質土器、備前焼に限定できる陶器、瓦質土器などの中世の資料がある。今回の調査では、この時期の中でも特に14世紀後半～15世紀に所属する資料が最も多く出土している。なお、この時期に所属する瓦器があったと推測できるが、すでに述べたように出土量が少ないうえに残存状況が悪いため、よく分からない。土師器は小皿類が出土している。耕土下～床土 (LN 2) から3点、包含層 (LN 3) から10点 (第3図-6、7)、包含層を切り込む鋤溝 (LN 3-LN12) から1点、同じく鋤溝 (LN 3-LN13) (第3図-14) から1点、同じく鋤溝 (LN 3-LN15) から1点出土している。また同じく包含層を切り込む浅い落ち込み (LN 3-LN17) から1点、溝1 (LN46、LN47) から3点 (第6図-17～19)、溝2 (LN30-1、LN30-2) から19点 (第7図-30、31)、溝3 (LN29) から12点、土壙7 (LN33) から1点、土壙12 (LN45) から1点、Pit37 (LN22) から2点が出土している。

土師質土器は、耕土1 (LN 1)、耕土下～床土 (LN 2)、包含層 (LN 3)、溝1 (LN46)、溝2 (LN30-1、LN30-2、LN26)、土壙2 (LN27)、土壙9 (LN21)、Pit15 (LN23)、Pit40 (LN44)、Pit72 (LN59)、Pit73 (LN62)、Pit89 (LN64)、木の根による攪乱 (LN56) から出土している。形態の分かるものには練鉢が耕土下～床土 (LN 2) から1点、搦鉢が包含層 (LN 3)、溝1 (LN46) からそれぞれ1点ずつ、溝2 (LN30-2) から3点 (第7図-32、35)、羽釜が耕土1 (LN 1) から1点、溝1 (LN46) から3点、溝2 (LN30-2) から1点 (第7図-42)、土壙9 (LN21) から1点、Pit15 (LN23) から1点、木の根による攪乱穴 (LN56) から2点出土している。

須恵質土器としたのは、いわゆる東播系の搦鉢あるいは片口のことである。耕土 (LN 1) から1点 (第3図-2)、包含層 (LN 3) から5点、鋤溝 (LN 3-LN11)、溝2 (LN30-2)、土壙9 (LN21)、Pit15 (LN23)、Pit37 (LN41) からそれぞれ1点ずつ出土している。

備前焼の播鉢が1点（第3図-10）であるが、包含層（LN 3）から出土している。

瓦質土器は、今回の調査で最も多く、耕土下～床土（LN 2）、包含層（LN 3）、鋤溝（LN 3-LN12）溝1（LN46、LN47、LN48）、溝2（LN24、LN30-1、LN30-2、LN26）、溝3（LN29）、土壙1（LN31）、土壙2（LN27）、土壙9（LN21）、土壙12（LN45）、Pit37（LN41、LN22）、Pit38（LN42）、Pit40（LN44）、Pit63（LN58）、Pit83（LN69）、木の根による攪乱（LN56）から出土している。形態の分かるものには、播鉢、羽釜、甕、火鉢がある。

播鉢は、包含層（LN 3）から3点、溝1（LN48）から1点（第6図-22）、溝2（LN30-1、LN30-2、LN26）から24点（第7図-33、34）、土壙1（LN31）から1点、Pit37（LN22）から1点出土している。

羽釜は、耕土下～床土（LN 2）から3点、包含層（LN 3）から19点、溝1（LN46、LN47、LN48）から13点（第6図-23～27）、溝2（LN30-1、LN30-2）から47点（第7図-37～43）、土壙1（LN31）から1点（第9図-53）、土壙2（LN27）から1点、土壙12（LN45）から2点、Pit19（LN55）から1点、Pit37（LN22）から3点、Pit38（LN42）から1点、Pit63（LN58）から1点、木の根による攪乱穴（LN56）から1点出土している。羽釜は形態的特徴、技術的特徴からみると大きく3種類に分けることができる。まず、口頸部の立ち上がりが短く、体部外面の調整にヘラミガキ調整がおこなわれているもの（第7図-37）で、図示したもの1点だけの出土で、胎土は精良で、他の羽釜とは異なる。次に量的に最も多いのは、口頸部が3.5cm程度、直立して立ち上がるか、あるいは内傾して立ち上がり、その外面に3条の段が巡るものである。鏝部下の体部は横方向のヘラケズリ調整が施されている。なお、先に述べた土師質土器の羽釜も基本的にはこの形態で、製作技術も同じである（第7図-42）。そしてもう1種は口頸部の長さ、胎土、製作技術などは先に述べた、量的に多いものと類似するが、直立して、外面に施された段が2条というものである。この形態は1点だけの出土である（第6図-27）。

甕は、包含層（LN 3）から4点（挿図3-9）、溝1（LN46、LN47、LN48）から10点（第6図-20、21）、溝2（LN30-1、LN30-2、LN26）から23点（第7図-44）、土壙1（LN31）から1点、土壙12（LN45）から1点、Pit37（LN22）から2点、木の根による攪乱穴（LN56）から1点出土している。

火鉢は、いわゆる奈良火鉢が溝1（LN48）から1点（第6図-28）出土している。

次に17世紀以降、近世に所属する資料が、耕土（LN 1）、耕土下～床土（LN 2）、包含層（LN 3）、鋤溝（LN 3-LN13）、鋤溝（LN 3-LN19）、溝2（LN24、LN30-LN1、LN30-LN 2、LN26）、溝3（LN29）、土壙1（LN31）、土壙2（LN27）、土壙7（LN33）、土壙8（LN34）、土壙11（LN57）、Pit15（LN23）、Pit35（LN28）、Pit37（LN22）、Pit38（LN42）、Pit40（LN44）、木の根による攪乱（LN56）から出土している。最も多いのは陶磁器であるが、土師質土器も出土している（註4）。

土師質土器には、大型の甕や火鉢がある。甕は、鋤溝（LN 3-LN19）、土壙9（LN21）、土壙11（LN57）、（第9図-63）、Pit15（LN23）から1点ずつ出土している。火鉢は木の根による攪乱穴（LN56）から1点出土している（註5）。

陶器は、いわゆる堺播鉢と呼ばれているものが、溝2（LN30-2）から1点（第7図-36）、木の根による攪乱穴（LN56）から1点出土している。

磁器の中には伊万里焼の小壺（第9図-62）、茶碗、皿などがある。茶碗の中には見込みに蛇の目釉剥ぎの施されたものが土壙7（LN33）とPit34（LN28）から出土していて（第9図-61、第10図-64、65）、その製作技術的特徴から18世紀代と所属時期の限定できるものも含まれている。

【瓦類】

瓦類には、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦がある。その所属時期は奈良時代から近世におよぶが、当然のことではあるが、やはり中世から近世のものが多い。

最も古い瓦類は、奈良時代後期に所属する瓦で、桜井遺跡から南西 1.6km の位置にある新堂廃寺で所用された天平期の平瓦である。凸面に縄目叩きの施された一枚作りの平瓦で 3 点出土している（第 8 図-46～48）。桜井遺跡で新堂廃寺の所用瓦が出土することは、従来から知られている（註 6）。

次にこれらの新堂廃寺所用瓦を除いた瓦類についての技術的傾向をみていく。

軒丸瓦は、左巻き三つ巴文軒丸瓦が 1 点（第 12 図-76）、木の根による攪乱穴（LN15）から出土しているだけである。丸瓦部が少し残存しているだけであるが、他に出土している丸瓦類の状況と、この軒丸瓦の銀色に発色する燻された瓦の焼成具合からみて、玉縁式丸瓦が接合されていたことは分かる。おそらく近世の軒丸瓦であろう。

軒平瓦は 5 点出土している。部分的であっても瓦当文様が残っているのは 3 種類で 4 点ある。あと 1 点は瓦当部が完全に剥がれてしまったもので、その痕跡から軒平瓦であったことが窺われるだけである。瓦当文様のひとつは、中央に菱形文を置き、その左右に唐草文を配す、菱形唐草文軒平瓦で、包含層（LN 3）と溝 2（LN30-2）からそれぞれ 1 点ずつ出土している（第 3 図-12、第 8 図-45）。中央の菱形文は内部が四等分され、その周囲に小さな 1 本の唐草が配されている。左右の唐草文は、中央に向かって 3 本 1 組の右巻きの唐草文を 2 回、左端のみ 2 本 1 組の唐草が施されている。残念ながら中央部から左半分のみ残存のため、これらの唐草文が均整唐草文であったのか、偏向唐草文であったのかは分からない。平瓦部との接合は、平瓦広端部先端を斜めに切り取り、そこに瓦当面になる粘土を貼り足して、段顎で仕上げている。焼成は堅く、須恵質に焼きあがっている。

もう一つの瓦当文様をもつ軒平瓦は、残存部に水波文と唐草文が配されていたことがわかるだけで、包含層（LN 3）から 1 点出土している（第 3 図-11）。段顎で仕上げられている。焼成は典型的な瓦質である。

もう一つの瓦当文様をもつ軒平瓦は中心飾りに花卉を置いて、左右にデフォルメされた均整唐草文が配されていたと推測できるもので、木の根による攪乱穴（LN56）から 1 点（第 12 図-77）出土している。文様構成からみて、近世に所属すると推測される。

丸瓦は全体形の推測できるものはすべて玉縁式丸瓦で、行基式丸瓦と認定できるものはなかった。丸瓦は凹面の痕跡の違いから、大きく 3 種にわけることができる。一つは、布目痕跡がみられるだけのもの、もう一つは布目痕跡と吊り紐痕跡のみられるもの、もう一つは刺し子の施された布目痕跡と棒状の叩き目痕跡の見られるものである。前 2 者は、粘土板はコビキ A によって切り取られていて、凸面は縄目タタキがスリ消されている。また両者とも胎土、焼成状況なども類似している。それに対して、後者の棒状の叩き目の残されたものはコビキ B によって粘土板が切り離され、凸面には縄目などの痕跡も観察できない。縦方向にナデ調整を施した痕跡だけが明瞭に認められ、銀色に発色している。おそらく先に述べた、今回の調査で唯一出土している軒丸瓦（第 12 図-76）に、この種の丸瓦部が接合されていたと考えられる。

凹面に布目痕跡だけが残るもののなかに、綴じ合わせ痕の認められるものが、土壌 1（LN31）から出土している（第 9 図-54）。二等辺三角形の開口部のみられることから完全な布筒状に縫い綴じたのではなく、上部のみ綴じ付けたものであったことが分かる。

吊り紐痕の見られるものは溝1 (LN48) から1点 (第6図-29)、溝2 (LN30-1) から3点 (第8図-49、50、52) 出土している。布筒は4点とも別の布筒である。吊り紐の綴じ付け方が観察できるのは (第6図-29) と (第8図-49) だけであるが、両者ともに布筒の内側に抜き通すことで、綴じつけられている。また外側に垂れ下がった吊り紐の垂れ下がり度は、溝1出土の (第6図-29) だけが浅く、溝2出土のものは、すべて深く垂れ下がっている。この紐吊り痕の綴じ付けの状況と垂れ下がり具合から合わせみて、これらの丸瓦の所属時期は14世紀末頃と推測できる (山崎2000)。

凹面に刺子の施された布筒と棒状叩き目調整の施された痕跡の認められる丸瓦は、溝2 (LN30-1) から3点 (第8図-51)、土壙2 (LN27) から1点 (第9図-56)、刺子の施された布筒だけが認められる丸瓦は土壙1 (LN31) から1点 (第9図-55)、Pit35 (LN28) から1点 (第10図-67) 出土していて、すべてコビキBで粘土板の切り取りがおこなわれている。このことから、これらの丸瓦の所属時期は16世紀末以降の製造と考えられる。

【金属類】

金属類とした鉄釘、古銭 (寛永通宝) は、ともにPit35 (LN28) から出土している。鉄釘は中央部が一辺0.5cmの断面四角形で、ほぼ中央から先端にかけて残存している。先端部は曲がっている。寛永通宝は、直径2.5cm、中央には一辺0.5cmを測る正方形の穴が開けられている。

【石器類】

石器類には、サヌカイト製の削器、剥片、石核と、流紋岩製の砥石 (註7) がある。

サヌカイト製の削器は溝2 (LN30-2) から1点している。主剥離面の刃部の右側を打面にした剥片で、打面側にリタッチを入れて削器に加工している。削器としての大きさは、長さ3.91cm、幅7.21cm、厚さ1.5cmである。なお、この厚さの計測場所は、剥片の末端面で、原面である。剥片の打面はリタッチによって取り去られている。なお、リタッチは先行剥離面側に入れられている。剥片は、包含層 (LN3) から1点、溝2 (LN30-2) から1点、Pit37 (LN22) から3点出土している。包含層出土のものは、長さ3.5cm、幅3.5cm、厚さ0.45cmの剥片で、先行剥離面は1枚で、主剥離面とほぼ同方向からの打撃による剥離面である。なお、溝2 (LN30-2) から出土した剥片には2次調整が施されている。

石核は1点あり、Pit37 (LN22) から出土している。石核の表面は発掘による、いわゆるガジリを除いては、かなりローリングを受けている。

流紋岩製の砥石 (第10図-66) は、Pit35 (LN28) から1点出土していて、石質のキメの細かな点からみて、仕上げ砥であったと考えられる。所属時期は、Pit35出土からの供伴遺物が、近世のもので占められることから、この砥石の所属時期も近世と推測される。

【埴輪】

基底部 (第3図-1) が1点だけが耕土 (LN1) から出土している。従来から、石川の左岸の段丘上に埴丘は残されていないものの、古墳が何基かあったことがわかっている。いわゆる埋没古墳である。今回の調査区の北側の喜志遺跡周辺で9ヶ所から、南側の中野遺跡に最も近い場所では3ヶ所から埴輪が見つかった (栗田1995)。 (栗田)

第4章 まとめ

今回の調査区は、従来から桜井遺跡として把握されてきた遺跡のなかでも南東端に近く、すぐ東側に流れる石川が形成した中位段丘東端にあたる。すでに述べたとおり、桜井遺跡は古代から中世に至る遺構が濃密に確認されている地域ではあるが、今回の調査区では古代に形成された可能性が高いと推測できる遺構は土壌5と土壌6、确实とは言い難いが、古代の可能性も考慮しておかなければならない遺構としてPit16、Pit30、Pit31、Pit37があるものの、それらを合わせても6ヶ所にとどまり、地山面で検出された100ヶ所を超える遺構は中世か近世に構築されたものであることが確認された。

桜井遺跡は、1980年に主要地方道美原・太子線の新設工事によって、中世の遺構が発見され、注目されるようになった。1984年度に大阪府教育委員会によって本格的に調査され、その後1997年度(栗田1998)には富田林市遺跡調査会によって、2001年度と2011年度には富田林市教育委員会によって、今回の調査区の東西に接して調査が行われている。2001年度はすぐ西隣で、2011年の調査はすぐ東隣にあたる。今回の報告にあたっては、2001年度、2011年の調査成果は重要な検討材料になるはずであったが、遺構、遺物とも未整理であるため、残念ながら今回の検討には加えることができなかった。

大阪府教育委員会による1984年度の調査は、今回の調査区に近接した北西約100mの位置に調査区が設定されたが、今回の調査区の成果と類似して、中世の掘立柱建物や井戸が検出されている(註8)。1997年度の調査区は、桜井遺跡としては中央部西端にあたり、今回の調査区とは北西へ400m離れた地点に調査区が設定された。地山面で検出された遺構の大半は7世紀後半～8世紀中葉に比定され、上層に中世の包含層があったことが確認されている。現在報告されているものからだけの検討でしかないが、これら既往の調査を合わせ考えると、同じ桜井遺跡とされていても、東側と西側では様相が異なることが想定できるのである(註9)。

この背景には、桜井遺跡の南西約1000mあたりに広がる新堂廃寺との関係が示唆されているように考えられる。すなわち、新堂廃寺が創建された前後に、新堂廃寺の周辺域にも開発の波が押し寄せていたことは想像に難くないが、その開発の波が桜井遺跡の西側域にもおよんでいたことが推測されるのである。桜井遺跡の場合は、約1000mとの距離の遠さが、新堂廃寺の創建から遅れること約半世紀の後の7世紀後半期に入ってから開発であるが、新堂廃寺のすぐ東側に広がる中野遺跡では新堂廃寺創建より早い時期からの開発が、さらに桜井遺跡よりもより新堂廃寺に近い畑ヶ田遺跡では、ほぼ同じ頃に開発されたと可能性が想定されている(註10)。このように新堂廃寺の建造との関係で周辺域を改めて見回すと、その開発が新堂廃寺の近接地から徐々に遠方に向かって、広がっていった状況が見て取れるのである。

今回の調査でも天平期の新堂廃寺に所用されたものとまったく同じ道具で作られた平瓦が3点確認された。成形台で造られた一枚作りのものである。これらの瓦は、オガンジ池瓦窯(Ⅱ号窯)で焼成されたものである(栗田2005)。これに類する造瓦道具の一致をみる新堂廃寺の瓦埴類は、すでに報告されているものでは、中野遺跡から飛鳥期の平瓦Ⅱ0 Za [Aa] 群[布袋ヌ平1]の出土が報告されている(栗田1982;挿図19)(註11)。また、まだ未報告ではあるが、1988年度、1989年度と2ヵ年にわたって調査された、府道狭山・河南線建設工事に伴う中野遺跡の調査でも飛鳥期の平瓦が出土していることを確認している(註12)。なぜこれらの新堂廃寺の瓦が周辺域に広がっ

ているのかは、遺構の検出状況の詳細な検討と、遺物の整理がおこなわれていないため、今後の整理調査を待つしかないが、いずれにしても古代の富田林では、新堂廃寺を軸にした遺跡の広がり方を考えることは重要であろう。

今回の調査で、中心となるべき主要な遺構は、中世後半期のものである。遺構として明確な性格をもつものに掘立柱建物が1棟分ある。また、この掘立柱建物を直接取り囲んだものではないが、屋敷地を区画するためであったと想定される溝なども確認された。すでに述べたように今回の調査区の東西で隣接して行われた調査が、遺構、遺物とも未整理であるため面的な広がりを検討できないことが残念であるが、今はただ「この調査区では区画溝をもつような屋敷地が広がっていたことが想定できる」、ということで終わっておかなければならない。そしてその時期は、おそらくは出土遺物の中で多く出土している煮沸具の羽釜から14世紀後半～15世紀となろう。この時期の同じような区画溝をもつ屋敷地は、すでに第1章でも述べられているように、新堂廃寺の北西部でも確認されている。

近世の遺構も確認されている。Pit35がそれである。Pit内に残された遺物（土師器、磁器、丸瓦、平瓦、鉄釘、古銭、砥石）の組み合わせから何らかの意図を考えたいところであるが、実際にはよく分からない。近世瓦の技術的特徴をもつ瓦群、寛永通宝、肥前陶磁器の技術的な痕跡から18世紀後半～19世紀に比定できるが、出土遺物全体に時期的な矛盾のみられないことから、時を同じくして入れられたものであることは確かであろう。近世以降に造られた可能性が高いものとしてPit15、Pit72、Pit73、Pit85、Pit110もあげることができるが、それらの性格はよく分からない。

今回の桜井遺跡の調査では、具体的な中世の生活を明らかにすることはできなかったが、すくなくともすでに調査の終わっている周辺地の調査の報告がなされれば、もっと中世の様子が明らかになることは確実であろう。今はその時が早く来ることを願うしかない。

(粟田)

【註】

1. 1993年度に大阪大谷大学の道路を挟んで南接する地区が、錦聖遺跡として調査されている。この調査の正式報告はなされていないが、甘南備遺跡で類似の焼成遺構が見つかったことから、遺構の重要度を考慮して、併せて報告されたようである。
2. 1995年から1997年にかけて、西大寺山遺跡群という名称で調査された中で確認されている。大規模な住宅地開発に伴う調査で、古墳、山城など、注目すべき発見が相次いだ。正式な報告書は未刊行であるが、注目されている遺構については、いくつか紹介されている。山城については青木昭和氏によって2008年に紹介されている（青木2008）。
3. 調査終了後、羽曳野市教育委員会の伊藤聖浩氏から開発域（調査範囲外で調査区の東側）で遺構が露出しているとの連絡を受けた。筆者が駆けつけたところ、遺構が2基確認できた。調査も終了していたため、簡易的なスケッチと記録を採ることでは、対応できなかったことが心残りとなったものの、まだ状況が把握できたのは救いであった。連絡をくださった伊藤氏には心から感謝を申し上げたい。
なお、今回のような不十分な試掘調査が、遺構分布域の把握に支障をきたす結果となったことは、試掘調査担当者は重く受け止めるべきであろう。
4. 中世に所属する資料とした土師器の小皿や土師質土器としたものの中には、近世のものも含まれる可能性があるが、小破片であることと、遺構の時期を決定するのに影響を与えないと判断したため、ここでは取り上げなかった。また、近現代とすべきコバルト使用の染付けの磁器も含めていない。
5. 出土場所、胎土からみて、所属時期は近代以降かもしれない。
6. 大阪府教育委員会の小林義孝氏によって、1985年に報告された『錦織細井廃寺発掘調査概要』の中で、錦織細井廃寺と同じ年に調査した桜井遺跡から、藤澤一夫氏分類の「複子葉弁文系類、第1C形式等」と同範の軒丸瓦片が出土したことが述べられている（pp.39-40：第21図）。この種の軒丸瓦は、私たちが軒丸瓦L群の瓦範を使用したものと同定したもので、ここで示した天平期の平瓦と同じ造瓦単位の所産としている（粟田2009）。
7. 砥石の石材鑑定は、森山義博先生のご教示による。
8. 筆者が、1998年度の桜井遺跡の報告書作成時に、大阪府教育委員会の小林義孝氏からご教示いただいた。
9. 富田林市教育委員会が2001年度、2011年度に調査した地点は、残念ながら未整理・未報告であるため、今回の検討に加えることができなかった。東西に隣接する地区であることから、無視することのできない場所であるだけに非常に残念である。発掘で得られた重要な調査データも使えないのであれば、調査しなかったのと同じことになる。調査に要した時間、費用、労力を無駄にしないためにも、報告の責務を果たす方向に向かって欲しいと願うばかりである。
10. 畑ヶ田遺跡も数度にわたる調査が行われているが、残念ながらいずれも未報告である。畑ヶ田遺跡のなかでも注目すべき調査の一つとして、2011年度におこなわれた調査がある。この時の調査では新堂廃寺の創建期にあたる7世紀代と、新堂廃寺の完成期とも言うべき天平期に遺跡地周辺が整地されていたことが確認されている。2011年度からはじまった報告書作成作業は、現在もなお作成中である。
11. 中野遺跡の資料の報告時には、新堂廃寺の瓦埴類の整理が十分に進んでおらず、平瓦の表記方法が確定していなかった。ここで表記した名称は、2003年度の新堂廃寺・オガンジ池瓦窯の報告の際に確定した属性表記に直したものである（粟田2003b）。
12. 遺構の検討もなされておらず、遺物整理も水洗と注記作業でとまっているが、コンテナの積みなおし整理の際に筆者が確認している。

【引用文献】

- 青木昭和 (2008) 「42. 西大寺山遺跡 (山中田城)」, 『南河内における中世城館の調査』, 大阪, pp.105-107.
- 栗田 薫 (1982) 「IV出土遺物 5. 瓦」, 『中野遺跡発掘調査概要Ⅲ』(富田林市埋蔵文化財調査報告7), 大阪, p.39.
- 栗田 薫 (1995) 「4-3. 石川中流域、段丘上の埋没古墳」, 『平成6年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書』, 大阪, pp.56-66.
- 栗田 薫 (1998) 『桜井遺跡』(富田林市遺跡調査会報告16) 大阪.
- 栗田 薫 (2002) 「お亀石古墳の築造年代—新堂廃寺出土平瓦との比較をとおして—」, 『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』, 大阪, pp.16-32.
- 栗田 薫 (2003a) 「第Ⅱ章 遺構の発掘 第3項 寺域外の調査」, 『新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳』富田林市埋蔵文化財調査報告35, 大阪, pp.43-46.
- 栗田 薫 (2003b) 「第Ⅲ章 遺物の読み」, 『新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳』富田林市埋蔵文化財調査報告35, 大阪, pp.84-252.
- 栗田 薫 (2005) 「新堂廃寺・オガンジ池瓦窯出土瓦の研究」, 『大阪府富田林市所在 新堂廃寺・オガンジ池瓦窯出土瓦の研究 京都大学総合博物館平成17年春季企画展示のための研究成果』, 京都 pp.17-174
- 栗田 薫 (2009) 「第Ⅱ部『新堂廃寺造営に際して展開された7つの造瓦単位』, 瓦研究の新方法—富田林・新堂廃寺の瓦磚類資料の研究から—」, 京都大学総合博物館平成17年春季企画展カタログ(補填版), 京都, pp.15-33.
- 小林義孝 (1985) 『錦織細井廃寺発掘調査報告書』, 大阪, pp.39-40.
- 藤田徹也 (2004) 「第Ⅲ章 調査の成果④道路状遺構」, 『畑ヶ田南遺跡Ⅰ市営若松第1住宅建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(富田林市遺跡調査会報告24), 大阪 p.17.
- 藤田徹也 (2008) 「3 南河内における中世前半期の土器概観」, 『南河内における中世城館の調査』, 大阪, pp.14-22.
- 平方扶左子 (1997) 「IV 焼成遺構」, 『甘南備遺跡』(富田林遺跡調査会報告4), 大阪 pp.7-8.
- 山崎信二 (2000) 「Ⅰ 研究方法 B 製作技法や形態的変遷からみた瓦の前後関係 (Ⅰ) 丸瓦吊り紐の変遷の分析」, 『奈良国立文化財研究所学報第59冊 中世瓦の研究』, 東京, pp.14-25.

表2 遺物観察表（その1）

挿図番号	遺構土層	種類	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
3-1	第1層	円筒埴輪	基底部径 41.2 残存器高 7.9	円筒埴輪の基底部のみ残存。 基底部から上方に向かって開くように延びる。	粘土紐の積み上げ痕跡が観察できる。 外面：横方向の刷毛目の上に縦方向の刷毛目。 一部刷毛目をなで調整で消している。 内面：なで調整。指頭圧痕が明瞭に残る。	土師質。残存部位には黒斑なし。
3-2	第1層	須恵質土器 練鉢	口径 33.2 残存器高 12.8	丸みのある体部から、大きく開く口縁部をもつ。 口縁部は内傾気味に開いて、端部は上下に拡張する。	内外面とも横なで調整。	東播系の練鉢。片口の可能性もある。 森田編年の第三期-1段階(13世紀代)
3-3	第2層	須恵器 坏蓋	口径 16.9 残存器高 1.8	おそらく天井部中央に扁平なつまみが付けられていたはずであるが欠失している。 天井部は扁平で、口縁端部は下方へ短く屈曲し、先端はにぶい稜をもつ。	天井部外面の中央部約3分の2の範囲は回転ヘラケズリ調整。他は内外面とも回転なで調整。	陶邑田辺編年のMT21型式(8世紀前半)。
3-4	第2層	須恵器 坏身	口径 14.1 残存器高 3.8	底部と体部の境は丸みをもつ。体部から口縁部に向かって外傾しながら延びる。口縁端部は丸くおさまる。	底部外面は調整が施されておらず、粘土紐まきあけの継ぎ目が螺旋状に残る。 底部外面を除いて、それ以外は内外面とも回転なで調整。	陶邑田辺編年のMT21型式(8世紀前半)。
3-5	第2層	瓦器 椀	高台径 6.6 高台高 0.7 残存器高 2.0	高台部から底部にかけて残存。 断面長方形の高台は、外傾して開く。	外面は残りが悪いためヘラ磨きの有無は分からないが、内面は短い単位のヘラ磨きが口縁部に併行する方向に施されている。ただし見込みにはヘラ磨きは施されていない。	おそらく和泉型の瓦器椀で、11世紀末～12世紀初め。
3-6	第3層	土師器 小皿	口径 7.1 器高 6.5	外傾する口縁部と中央部を底上げた丸みをもつ。底部が境目で角張る形態をもつ。口縁端部は丸くおさまる。	手づくね成形。 口縁部内外面はヨコナデ調整。底部内外面はナデ調整。	
3-7	第3層	土師器 小皿	口径 10.0 残存器高 7.2	底部の大半が欠失。口縁部から底部にかけてならかな丸みをもつ。	手づくね成形。 口縁部内外面はヨコナデ調整。底部内外面はナデ調整。	
3-8	第3層	瓦質土器 羽釜	口径 22.2 鋳部径 28.2 鋳部幅 2.3 残存器高 10.2	口縁部から体部にかけて残存。わずかに内傾する口縁部となだらかな丸みをもつ体部をもつ。口縁部と体部の境には鋳部が巡る。貼り付け位置は口縁部上面から底部に向かって約2.1cmの位置に鋳部上面がくる。 口縁部外面には2条の段が巡る。	口縁部内外面と鋳部は強いヨコナデ調整。口縁部内面は深いナデ調整のため、凹線状の窪みができている。また、一部にナデ調整より前に施されたと考えられる刷毛目が認められる。横方向の鋳部貼り付け時のナデ調整が鋳部下面に認められる。 体部外面は横方向のヘラケズリ調整。体部内面はなで調整。	鋳柄編年によると14世紀後半。
3-9	第3層	瓦質土器 甕	口径 29.2 残存器高 4.6	口頸部のみ残存。 直立して立ち上がる頸部に、大きく外反して開く口縁部をもつ。	内外面とも横なで調整。	口縁部の形態が龍泉寺南群瓦窯3号窯で焼成された甕に類似する。 中村浩1981「龍泉寺-坊院跡および瓦窯跡群の発掘調査報告書-」。 鋳柄編年によると14世紀代。
3-10	第3層	陶器 搦鉢	口径 27.2 残存器高 5.0	受け口状の口縁部をもつ。口縁部と体部の境目が残存。	口縁部は内外面ともヨコナデ調整。体部内面の搦り目の原体はよく分からないが、残存部では幅約0.4cmで、約0.3cmの間隔をあけて5本だけまとまって残っている。隣りの搦り目とは、少なくとも8.5cm以上開けて施されていたことは観察できる。	備前焼きの搦鉢。 15世紀代か?
3-11	第3層	軒平瓦	瓦当部残存幅 2.9 瓦当部厚 3.2 残存長 6.3 残存幅 8.3 厚さ 2.8	段頸をもつ軒平瓦。左上角部のみ残存。瓦当文様の全容は分からないが、残存部では唐草文と水波文が施されている。 外縁部の幅は上縁部で約1.2cm、側縁部は1.8cmを測る。外縁部の高さは0.6cmを測る。	段頸。頸部を貼り足している。瓦当部上面は面取りされている。 平瓦部凹面・凸面ともナデ調整。	焼成は典型的な瓦質。
3-12	第3層	軒平瓦	瓦当部残存幅 4.1 瓦当部厚 2.5 残存長 7.3 残存幅 13.2 厚さ 2.4	中央部から左半部が残存する変形唐草文軒平瓦である。中心飾りの変形は内部が四分割され、その周囲のスペースに小さな1本の外巻きの唐草文で飾る。さらにその左側には、中央に向かって3本一組の右巻きの唐草文を2回、左端のみ2本一組の唐草が施されている。 外縁は幅1cm前後の素縁で囲む。外縁部の高さは0.7cmを測る。	段頸。平瓦部先端を斜めに切り取り、そこに瓦当面になる粘土板が貼り足されている。瓦頭部上面は面取りされている。 瓦当面の上・下・裏面はナデ調整。 平瓦部の凹面・凸面はナデ調整。	焼成は堅く、須恵質になっている。
3-13	第3層	軒平瓦	残存長 16.2 残存幅 13.5 厚さ 2.6	瓦当部は欠失している。 おそらく段頸。	凸面 縦方向のなで調整。 凹面 横方向のなで調整。	
3-14	鋤溝1	土師器 小皿	口径 10.2 器高 0.6	底部中央は欠失している。外傾する口縁部と中央部を底上げた丸みをもつ底部が境目で角張る形態をもつ。口縁端部上面は平坦面をなす。	手づくね成形。 口縁部内外面はヨコナデ調整。底部内外面はナデ調整。	
6-15	溝1 (LN48)	黒色土器 椀	高台径 7.2 高台高 0.7 残存器高 21.3	高台部と底部の一部が残存。 断面四角形の高台は、やや開き気味につく。	内外面ともナデ調整。 高台部は貼り付け。	内外面とも黒色。 11世紀代

表2 遺物観察表(その2)

挿図番号	遺構土層	種類	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
6-16	溝1 (LN48)	土師質 瓶	底径 4.5 残存器高 8.2	口頸部は欠失している。肩部は張り出し、底部に向かってすぼんだ後、再び張り出して底部に至る。底部は平底。 容器としては用をなさず、直径1.2cmの棒状の穴が体部の1/3(残存長では2.8cm)まで穿たれているだけである。 中央の円孔は中心部ではなく、わずかに片寄った位置に穿たれている。	粘土塊から手づくねで作られている。すべてナデ調整が施されているが、底部から腰部というべき、すぼんだ位置まで指頭圧痕が明瞭に認められる。	
6-17	溝1 (LN47)	土師器 小皿	口径 7.6 器高 2.4	平底から屈曲した後、大きく外傾する口縁部をもつ。 底面中央は欠失している。	手づくね成形。 口縁部内外面と底部内面はヨコナデ調整。体部から底部にかけての外面はナデ調整。	
6-18	溝1 (LN46)	土師器 小皿	口径 8.0 残存器高 2.1	底部は欠失している。底部から屈曲して大きく外傾した後、外反する口縁部をもつ。	手づくね成形。 全体にナデ調整。外面に指頭圧痕が認められる。	
6-19	溝1 (LN46)	土師器 小皿	口径 8.3 残存器高 1.5	底部は欠失している。底部から屈曲して大きく外傾する口縁部をもつ。	手づくね成形。 全体にナデ調整。外面に指頭圧痕が認められる。	
6-20	溝1 (LN46)	瓦質土器 甕	口径 25.1 残存器高 5.2	口頸部から肩部にかけて残存。 肩部から屈曲した後、外傾気味に立ち上がる頸部に、外反して開く口縁部をもつ。 口縁部はつまみ気味に丸くおさまる。口縁部上面は平坦面をもつ。	口頸部内外面ともヨコナデ調整。肩部外面は平行タタキ調整、内面はナデ調整。	14世紀代後半。
6-21	溝1 (LN48)	瓦質土器 甕	口径 30.0 残存器高 4.2	口頸部から肩部にかけて残存。 肩部から外反して開く口縁部をもつ。口頸部に該当する部位はない。 口縁部は下方へつまみ気味に丸くおさまる。	口縁部内外面ともヨコナデ調整。肩部外面は平行タタキ調整、内面は横方向、あるいは斜め方向の刷毛目調整。刷毛目の原形は目の粗い工具と細かい工具の2種使われている。	13世紀末。
6-22	溝1 (LN48)	瓦質土器 捕鉢	口径 25.0 残存器高 7.0	体部下半から底部にかけては欠失している。 底部から外傾して開く口縁部をもつ。口縁部は断面三形状を呈し、外面は平坦な面をもつ。口縁部外面のすぐ下に幅0.8cmの凹線が巡る。 片口である。	口縁部内外面はヨコナデ調整。体部外面はヘラケズリ調整。内面は刷毛目調整の上からナデ調整。その後でカキ目調整。	14世紀代後半。
6-23	溝1 (LN47)	瓦質土器 羽釜	口径 20.1 罎部径 27.5 罎部幅 2.6 残存器高 5.0	口縁部から体部にかけて残存。わずかに内傾する口縁部となどらかな丸みをもつ体部をもつ。口縁部と体部の境には罎部が巡る。貼り付け位置は口縁部上面から底部に向かって約1.4cmの位置に罎部上面がくる。罎部はほぼ水平に延びる。 口縁部外面には3条の段が巡る。	口縁部内外面と罎部は横方向のナデ調整。口縁部内面は刷毛目調整の後にナデ調整。 体部外面は横方向のヘラケズリ調整。体部内面はナデ調整。	14世紀代後半。
6-24	溝1 (LN48)	瓦質土器 羽釜	口径 21.6 罎部径 27.8 罎部幅 2.0 残存器高 5.9	口縁部から体部にかけて残存。内傾する口縁部となどらかな丸みをもつ体部をもつ。口縁部と体部の境には罎部が巡る。貼り付け位置は口縁部上面から底部に向かって約2.3cmの位置に罎部上面がくる。罎部上部は口縁部の一部をなすように貼り付けられている。罎部自体はほぼ水平に延びるが、先端部でつまみあげるように上を向いている。 口縁部外面には3条の段が巡る。	口縁部内外面と罎部はヨコナデ調整。口縁部から体部内面にかけて横方向あるいは斜め方向の細かい刷毛目調整。 体部外面は横方向のヘラケズリ調整。	14世紀後半～15世紀。
6-25	溝1 (LN48)	瓦質土器 羽釜	口径 22.2 罎部径 29.0 罎部幅 2.5 残存器高 8.5	口縁部から体部にかけて残存。わずかに内傾する口縁部となどらかな丸みをもつ体部をもつ。口縁部と体部の境には罎部が巡る。貼り付け位置は口縁部上面から底部に向かって約3.7cmの位置に罎部上面がくる。罎部上部は口縁部の一部をなすように貼り付けられている。罎部自体はほぼ水平に延びる。 口縁部外面には3条の段が巡る。	口縁部内外面と罎部はヨコナデ調整。 体部外面は横方向のヘラケズリ調整。体部内面は横方向あるいは斜め方向の細かい刷毛目調整。	罎部下面から体部にかけて煤がべっとり付着している。 14世紀後半から15世紀。
6-26	溝1 (LN48)	瓦質土器 羽釜	口径 25.0 罎部径 34.1 罎部幅 2.3 残存器高 9.0	口縁部から体部にかけて残存。大きく内傾する口縁部となどらかな丸みをもつ体部をもつ。口縁部と体部の境には罎部が巡る。貼り付け位置は口縁部上面から底部に向かって約3.1cmの位置に罎部上面がくる。罎部自体はほぼ水平に延びる。 口縁部外面には3条の段が巡る。	口縁部外面と罎部はヨコナデ調整。 口縁部から体部にかけての内面は細かい刷毛目調整。口縁部側は斜方向、体部側は横方向に施されている。 体部外面は横方向のヘラケズリ調整。	罎部下面に煤付着。 14世紀後半から15世紀。
6-27	溝1 (LN46)	瓦質土器 羽釜	口径 27.1 罎部径 33.8 罎部幅 2.5 残存器高 6.7	口縁部から体部にかけて残存。ほぼ直立する口縁部となどらかな丸みをもつ体部をもつ。口縁部と体部の境には罎部が巡る。貼り付け位置は口縁部上面から底部に向かって約4.0cmの位置に罎部上面がくる。罎部自体はほぼ水平に延びる。 口縁部外面には2条の段が巡る。	口縁部外面と罎部はヨコナデ調整。 口縁部内面は細かい斜方向の刷毛目調整。 体部外面はヘラケズリ調整。体部内面はナデ調整。	15世紀後半から16世紀。
6-28	溝1 (LN48)	瓦質土器 火鉢	口径 44.9 残存器高 7.5	口縁部から体部にかけて残存。大きく内湾する口縁部と丸みをもつ体部をもつ。口縁部は内側に引き出し、口縁部上面には幅広い平坦面を作る。口縁部外面に2条の凸帯を巡らせ、その間には中心に花文をもつ花菱文が押捺されている。	口縁部内外面、体部内面はヨコナデ調整。体部外面はナデ調整。	いわゆる奈良火鉢である。 立石聖志氏によって「浅鉢V」と分類された形態をもつ。 14世紀後半から15世紀。

表2 遺物観察表 (その3)

挿図 番号	遺構 土層	種類	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
6-29	溝1 (LN48)	丸瓦	残存長 134 中央部残存幅 18.5 厚さ 3.0	おそらく玉縁式丸瓦。 片側縁を含む中央部分のみ残存。	側面は面取りしている。 凸面は縄目タタキ調整の後、ナデ調整。 凹面には型木痕跡として、吊り紐痕が観察できる。 また、縦糸30本×横糸22本/3cmの織目の布使用の布筒が使用されている。	
7-30	溝2 (LN30-2)	土師器 小皿	口径 8.0 器高 1.7	丸みをもつ底部から、大きくなだらかに外傾する 口縁部をもつ。 底面中央はわずかであるが盛り上がっている。	手づくね成形。 内外面ともナデ調整。 体部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。	
7-31	溝2 (LN30-1)	土師器 小皿	口径 9.6 器高 2.1	いわゆるへそ皿である。 底面中央が底面から屈曲して大きく外傾して開く 口縁部をもつ。	手づくね成形。 口縁部内外面ともヨコナデ調整。体部外面から 底部外面にかけてナデ調整。 体部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。	
7-32	溝2 (LN30-2)	土師質土器 搦鉢	口径 29.4 残存器高 9.3	体部下半から底部にかけては欠失している。 底部から外傾して開く口縁部をもつ。口縁部は 上端でつまみあげて成形されているが、全体的 には断面三形状を呈す。口縁部外面は中央部が 浅く窪むものの、全体的には平坦な面をもつ。	口縁部内外面はヨコナデ調整。体部外面はナデ 調整。内面は描目が施されている。全体に粘土 の継ぎ目が目立つ。	14世紀代後半。
7-33	溝2 (LN30-2)	瓦質土器 搦鉢	口径 33.0 残存器高 6.4	体部下半から底部にかけては欠失している。 底部から外傾して開く口縁部をもつ。口縁部の 全体形は断面三形状を呈す。口縁部外面は中央 部が浅く窪むものの、全体的には平坦な面をもつ。	口縁部内外面はヨコナデ調整。体部外面はヘラ ケズリ調整。内面は描目が施されている。	内面に煤がべっとり付着 している。 14世紀代後半。
7-34	溝2 (LN30-2)	瓦質土器 搦鉢	口径 33.8 残存器高 9.6	体部下半から底部にかけては欠失している。 底部から外傾して開く口縁部をもつ。口縁部の 全体形は断面三形状を呈す。口縁部外面は中央 部が浅く窪むものの、全体的には平坦な面をもつ。	口縁部内外面はヨコナデ調整。体部外面は上半 が横方向の、下半部が縦方向のヘラケズリ調整。 内面は描目が施されている。	口縁部内面にわずかである が、煤が付着している。 14世紀代後半。
7-35	溝2 (LN30-2)	土師質土器 搦鉢	口径 30.2 残存器高 10.2	体部下半から底部にかけては欠失している。 底部から外傾して開く口縁部をもつ。口縁部は 断面三形状を呈し、外面は中央部が大きく窪む み、さらに口縁部外面のすぐ下に幅1.0cmの凹 線が巡る。	口縁部内外面はヨコナデ調整。体部外面は縦方 向のヘラケズリ調整。内面は描目が施されている。	14世紀代後半。
7-36	溝2 (LN30-2)	陶器 搦鉢	口径 25.4 器高 15.1	平底の底部から大きく外傾して開く体部から、屈 曲して立ち上がる口縁部は内傾する受け口状を 呈する。口縁部上内面は凹面を呈する。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面には描目が 施されている。	堺すり鉢。
7-37	溝2 (LN30-2)	瓦質土器 羽釜	口径 22.1 残存器高 7.0	鈿部と底部が欠失している。ほぼ直立する口縁 部に丸みのある体部をもつ。口縁部と体部の境 には約1.0cmの暑さの鈿部のはずれた痕跡が見 られる。貼り付け位置は口縁部上面から底部に 向かって1.1cmの位置に鈿部上面がくる。口縁 部外面には凹線が2条巡る。	口縁部内外面、体部内面はヨコナデ調整。体部 外面は横方向のヘラミガキ調整。口縁部内面 には指頭圧痕が認められる。	他の羽釜と比較して、胎 土がきわめて精良。
7-38	溝2 (LN30-2)	瓦質土器 羽釜	口径 19.2 鈿部径 25.0 鈿部幅 2.2 残存器高 10.4	口縁部から体部にかけて残存。ほぼ直立する口 縁部となだらかな丸みをもつ体部をもつ。口縁部 と体部の境には鈿部が巡る。貼り付け位置は口 縁部上面から底部に向かって約2.8cmの位置に 鈿部上面がくる。鈿部はほぼ水平に延びる。 口縁部外面には3条の段が巡る。口縁部でも鈿 部に近い位置に外面から斜め下、内面に向けて の焼成前の穿孔が2個ある。	口縁部内外面と鈿部はヨコナデ調整。 体部外面は横方向のヘラケズリ調整。体部内面 は横方向あるいは一部で斜め方向の刷毛目調 整。	鈿部下面から体部につ けて煤がべっとり付着して いる。
7-39	溝2 (LN30-2)	瓦質土器 羽釜	口径 23.2 鈿部径 29.1 鈿部幅 2.1 残存器高 10.8	口縁部から体部にかけて残存。わずかに内傾す る口縁部となだらかな丸みをもつ体部をもつ。口 縁部と体部の境には鈿部が巡る。貼り付け位置 は口縁部上面から底部に向かって約2.8cmの位 置に鈿部上面がくる。鈿部はほぼ水平に延びる。 口縁部外面には3条の段が巡る。	口縁部内外面と鈿部はヨコナデ調整。 体部外面は横方向のヘラケズリ調整。体部内面 は横方向あるいは斜め方向の刷毛目調整。体部 下半部は刷毛目調整の上からナデ調整。	鈿部下面から体部につ けて煤がべっとり付着して いる。
7-40	溝2 (LN30-1)	瓦質土器 羽釜	口径 23.7 鈿部径 30.8 鈿部幅 2.5 残存器高 11.0	口縁部から体部にかけて残存。内傾する口縁部 となだらかな丸みをもつ体部をもつ。口縁部と体 部の境には鈿部が巡る。貼り付け位置は口縁部 上面から底部に向かって約2.5cmの位置に鈿部 上面がくる。鈿部は上方につまみあげるように延 びる。 口縁部外面には3条の段が巡る。	口縁部内外面と鈿部はヨコナデ調整。 体部外面は横方向のヘラケズリ調整。体部内面 は斜め方向の刷毛目調整。体部下半部は刷毛目 調整の上からナデ調整。	
7-41	溝2 (LN30-2)	瓦質土器 羽釜	口径 24.2 鈿部径 30.0 鈿部幅 2.2 残存器高 6.8	口縁部から体部にかけて残存。わずかに内傾す る口縁部となだらかな丸みをもつ体部をもつ。口 縁部と体部の境には鈿部が巡る。貼り付け位置 は口縁部上面から底部に向かって約2.8cmの位 置に鈿部上面がくる。鈿部はほぼ水平に延びる。 口縁部外面には3条の段が巡る。	口縁部内外面はヨコナデ調整。 体部外面は横方向のヘラケズリ調整。口縁部か ら体部内面は横方向の刷毛目調整。	鈿部下面から体部につ けて煤がべっとり付着して いる。
7-42	溝2 (LN30-2)	土師質土器 羽釜	口径 27.2 鈿部径 34.6 鈿部幅 2.7 残存器高 6.7	口縁部から体部にかけて残存。わずかに内傾す る口縁部となだらかな丸みをもつ体部をもつ。口 縁部と体部の境には鈿部が巡る。貼り付け位置 は口縁部上面から底部に向かって約3.0cmの位 置に鈿部上面がくる。鈿部はほぼ水平に延びる。 口縁部外面には3条の段が巡る。	口縁部内外面と体部内面はヨコナデ調整。 体部外面は横方向のヘラケズリ調整。	

表2 遺物観察表（その4）

挿図番号	遺構土層	種類	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
7-43	溝2 (LN30-2)	瓦質土器 羽釜	口径 36.0 鋳部径 42.8 鋳部幅 2.9 残存器高 6.0	口縁部から体部にかけて残存。ほぼ直立する口縁部とおそらくなだらかな丸みをもつ体部をもつ。口縁部と体部の境には鋳部が巡る。貼り付け位置は口縁部上面から底部に向かって約3.8cmの位置に鋳部上面がくる。鋳部はほぼ水平に延びる。口縁部外面には2条の段が巡る。	口縁部上面から鋳部外面にかけてヨコナデ調整。体部外面は煤付着のためはつきりとは観察できないが、おそらく横方向のヘラケズリ調整。口縁部内面から体部内面上半部は横方向の刷毛目調整。体部下半部はナデ調整。	鋳部下面から体部にかけて煤がべっとり付着している。 15世紀から16世紀
7-44	溝2 (LN30-2)	瓦質土器 甕	口径 40.9 残存器高 9.0	口頸部から体部上部にかけて残存。それほど張り出さない体部から外反して開く口縁部をもつ。口頸部に該当する部位はない。口縁端部は下方へつまみ気味に丸くおさめる。	口縁部外面はヨコナデ調整。口縁部内面は横方向、あるいは斜方向の刷毛目調整。体部外面は平行タタキ調整、内面は横方向のヘラミガキ調整。	
8-45	溝2 (LN30-2)	軒平瓦	瓦当部残存幅 6.2 頸部厚 2.3 残存厚 2.6	第3層出土の資料（第3図-12）と同じ菱形唐草文軒平瓦の右端に近い部分の破片で、唐草文の一部のみ観察できる。残存部分は段頸部である。	段頸。瓦当部下面と表面はナデ調整。	
8-46	溝2 (LN30-2)	平瓦	残存長 6.5 残存幅 10.1 厚さ 2.0	一枚作りの平瓦である。	凹面にはナデ調整を施すが、ナデ調整の下には布目圧痕が明瞭に残る。縦糸20～24本×横糸22～28本/3cmの織りの布を使用する。新堂廃寺で「布ツ」とした布である。糸切り痕は凹凸両面に残る。凹面では左上から左下へ、凸面では右上から左下への方向に認められる。凸面には、ほぼ全面に縄目叩きが認められる。縄目叩きは新堂廃寺で「J2ar」としたものである。	新堂廃寺出土の平瓦Ⅲ2 J2ar群、「布ツ」使用の天平期の平瓦を搬入。
8-47	溝2 (LN30-2)	平瓦	残存長 9.9 残存幅 9.7 厚さ 2.6	一枚作りの平瓦である。	凹面にはナデ調整を施すが、ナデ調整の下には布目圧痕が明瞭に残る。縦糸20～24本×横糸22～28本/3cmの織りの布を使用する。新堂廃寺で「布ツ」とした布である。糸切り痕は凹面に残る。右上から左下への方向に認められる。凸面には、ほぼ全面に縄目叩きが認められる。縄目叩きは新堂廃寺で「J2ag」としたものである。	新堂廃寺出土の平瓦Ⅲ2 J2ag群、「布ツ」使用の天平期の平瓦を搬入。
8-48	溝2 (LN30-2)	平瓦	残存長 7.6 残存幅 11.1 厚さ 2.1	一枚作りの平瓦である。	凹面にはナデ調整を施すが、ナデ調整の下には布目圧痕が明瞭に残る。縦糸20～24本×横糸22～28本/3cmの織りの布を使用する。新堂廃寺で「布ツ」とした布である。凸面には、ほぼ全面に縄目叩きが認められる。縄目叩きは新堂廃寺で「J2as」としたものである。	新堂廃寺出土の平瓦Ⅲ2 J2as群、「布ツ」使用の天平期の平瓦を搬入。
8-49	溝2 (LN30-1)	丸瓦	残存長 7.4 狭端幅 22.1 厚さ 2.3 玉縁部長 4.1 玉縁幅 15.5 連結部幅 1.5	玉縁式丸瓦である。広端部側は欠失している。	玉縁部を作りつけた瓶型の型木を使用している。玉縁部と筒部の境は緩やかである。凹面は布目圧痕、吊り紐痕が認められる。布は縦糸30本×横糸26本/3cmの織りの布を使用している。吊り紐痕は1本の太く燃った縄で作られ、玉縁側で幅5cm間隔で、V字気味のU字状に長さ8cm程度垂らした痕跡として認められる。吊り紐の取り付け位置は玉縁部と筒部の境目に起点がある。おそらく一本の型木に被された布筒に4単位分を波状に綴じ付けられていたと想定できる。凸面は縄目叩きのあと、縦方向のナデ調整で叩き目が消されている。側面は分割後、玉縁部、筒部の両側縁とも凹面側に幅2cm程度の面取りを一緒におこなっている。その後、狭端面も凹面に面取りをおこなっている。さらに玉縁部の側面を切り取り調整し、その調整は筒部の連結部にもおよび、そのまま凹面側への面取りとして認められる。	
8-50	溝2 (LN30-1)	丸瓦	残存長 12.1 残存幅 13.2 厚さ 2.5	おそらく玉縁式の丸瓦である。玉縁部、片側縁部、広端部側は欠失している。	凹面は布目圧痕、吊り紐痕が認められる。布は縦糸26本×横糸24本/3cmの織りの布を使用している。吊り紐痕は1本の太く燃った縄で作られ、玉縁側で幅4cm以上の間隔で、V字気味のU字状に長さ4cm以上垂らした痕跡として認められる。凸面は縄目叩きのあと、縦方向のナデ調整で叩き目が消されている。側面は分割後、凹面側に幅2cm程度の面取りを一緒におこなっている。	
8-51	溝2 (LN30-1)	丸瓦	残存長 19.5 残存幅 12.5 厚さ 1.5 玉縁部長 3.1 連結部幅 1.1	玉縁式丸瓦である。片側縁部と広端部側は欠失している。	玉縁部を作りつけた瓶型の型木を使用している。玉縁部と筒部の境は緩やかである。凹面は布目圧痕と布筒に加工された時の刺子痕跡、棒状の叩き目の痕跡が認められる。布は縦糸30本×横糸30本/3cmの織りの布を使用している。刺子は布筒に併行する方向で縫われている。刺子痕跡は玉縁部と筒部の境目に顕著に観察できる。棒状の叩き目痕は幅0.8cmの長方形の棒状の工具で右から左方向にスライドさせて施されている。凸面は縦方向のナデ調整が施されている。側面は分割後、玉縁部、筒部の両側縁とも凹面側に幅1.3cm程度の面取りを一緒におこなっている。その後、狭端面も凹面に面取りをおこなっている。さらに玉縁部の側面を切り取り調整し、その調整は筒部の連結部にもおよび、そのまま凹面側への面取りとして認められる。	

表2 遺物観察表 (その5)

挿図番号	遺構土層	種類	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
8-52	溝 2 (LN30-1)	丸瓦	残存長 12.5 残存幅 14.3 厚さ 2.4	おそらく玉縁式の丸瓦である。玉縁部、片側縁部、広端部側は欠失している。	凹面は布目圧痕、吊り紐痕、糸切り痕が認められる。布は縦糸 34 本×横糸 34 本 /3cm の織りの布を使用している。吊り紐痕は 1 本の太く燃った縄で作られ、玉縁側で幅 2.5cm 以上の間隔で、U 字状に長さ 5cm 以上垂らした痕跡として認められる。糸切り痕は右上から左下に向かってなだらかな曲線を描いて認められる。 凸面は縄目叩きのあと、縦方向のナデ調整で叩き目が消されている。 側面は分割後、凹面側に幅 2cm 程度の面取りを一気におこなっている。	
9-53	土壇 1 (LN31)	瓦質土器 羽釜	口径 24.0 罎部径 29.6 罎部幅 2.0 残存器高 6.0	口縁部から体部にかけて残存。わずかに内傾する口縁部となだらかな丸みをもつ体部をもつ。口縁部と体部の境には罎部が巡る。貼り付け位置は口縁部上面から底部に向かって約 3.0cm の位置に罎部上面がくる。罎部はほぼ水平に延びるが、端部でわずかにつまみあげている。口縁部は内傾してわずかに凹面を呈する。 口縁部外面には 3 条の段が巡る。	口縁部外面と罎部はヨコナデ調整。口縁部内面から体部内面は横方向、あるいは斜方向の刷毛目調整。 体部外面は横方向のヘラケズリ調整。	14 世紀後半。
9-54	土壇 1 (LN31)	丸瓦	残存長 10.4 残存幅 10.0 連結部幅 1.5	玉縁式丸瓦である。玉縁部、片側縁部と広端部側は欠失している。	玉縁部を作りつけた瓶型の型木を使用している。玉縁部と筒部の境は屈曲している。 凹面は布目圧痕と布筒の縫い合わせ痕、開口部痕が認められる。布は縦糸 38 本×横糸 38 本 /3cm の織りの布を使用している。布筒は玉縁部と筒部の境目から、広端部に向けて三角形の開口部が認められることから、布を筒状に縫い合わせたものではなく、上部のみ縫い付けて、裾部は縫い合わされていないことが分かる。 凸面は縄目叩きのあと、縦方向のナデ調整で叩き目が消されている。 側面は分割後、凹面側に幅 2.2cm 程度、凸面側に幅 0.2cm の面取りをおこなっている。その後、狭端面も凹面側に面取りをおこなっている。	
9-55	土壇 1 (LN31)	丸瓦	残存長 17.9 残存幅 12.0	おそらく玉縁式丸瓦である。玉縁部から狭端部と片側縁部は欠失している。	凹面は布目圧痕と布筒に加工された時の刺子痕跡が認められる。布は縦糸 38 本×横糸 28 本 /3cm の織りの布を使用している。刺子は布筒に直交する方向で狭端部か広端部に向けて約 2.8cm の間隔で、ザクザクとぐし縫いされたように認められる。刺子痕跡は玉縁部と筒部の境目に顕著に観察できる。 凸面は縄目叩きのあと、縦方向のナデ調整が施されている。 側面は分割後、凹面側に幅 2.9cm 程度の面取りをおこなっている。広端面も凹面側に長さ 6.4cm の面取りをおこなったあと、ナデ調整をおこなっている。	
9-56	土壇 2 (LN27)	丸瓦	残存長 22.1 筒部長 19.9 筒部狭端幅 19.8 筒部広端幅 19.0 厚さ 15.5 連結部幅 1.2	玉縁式丸瓦である。玉縁部は欠失している。	玉縁部を作りつけた瓶型の型木を使用している。玉縁部と筒部の境は緩やかである。 凹面は布目圧痕と布筒に加工された時の刺子痕跡、棒状の叩き目の痕跡が認められる。布は縦糸 32 本×横糸 30 本 /3cm の織りの布を使用している。刺子は布筒に併行する方向で縫われていた。刺子痕跡は玉縁部と筒部の境目に顕著に観察できる。棒状の叩き目痕は幅 0.8 cm の長方形の長い棒状の工具で右から左方向にスライドさせて施されている。 凸面は縦方向のナデ調整が施されている。 側面は分割後、両側縁とも凹面側に幅 1.7cm 程度の面取りを、玉縁側も含めて一気におこなっている。その後、側面にはナデ調整が施されていて、凸面側が丸みをもつ。広端側も凹面側に長さ 1.6cm の面取りをおこなっている。	
9-57	土壇 6 (LN36)	土師器 小皿	口径 9.4 器高 2.0	底部と体部の境は丸みをもつびたあと、外反して口縁部に至る。口縁部は丸くおさまる。	手づくね成形。口縁部内外面、底部内面はヨコナデ調整。底部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。色調は乳白桃色。	11 世紀末から 12 世紀。
9-58	土壇 6 (LN36)	土師器 小皿	口径 11.8 器高 0.4	コースター状の扁平な皿で、口縁部はいわゆる「て」字状に近いが、端部は玉縁状に丸くおさまる。	手づくねで成形。口縁部内外面、底部内面はヨコナデ調整。底部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。色調は明橙色。	11 世紀末から 12 世紀。
9-59	土壇 6 (LN36)	土師器 坏	口径 13.8 残存器高 3.8	底部は欠失している。底部から体部に向かってなだらかに外傾して延びたのち、口縁部で角度を変えて外反する。	手づくねで成形。口縁部内外、体部内面はヨコナデ調整。体部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。色調は明橙色。	
9-60	土壇 6 (LN36)	土師器 坏	口径 14.1 器高 3.7	丸みをもつ底部からなだらかに丸みをもつ、口縁部に至る。	内外面とも摩滅のため調整不明。色調は乳白灰色。	

表2 遺物観察表（その6）

挿図番号	遺構土層	種類	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
9-61	土壌7 (LN33)	磁器 椀	口径 11.2 器高 5.4 高台径 4.6 高台高 0.8	伊万里焼の染付の椀である。	見込みは蛇の目粗ハギ。	18世紀代。
9-62	土壌7 (LN33)	磁器 小型壺	口径 5.8 器高 8.9 体部最大径 9.3 高台径 4.8 高台高 0.5	伊万里焼の染付の小壺である。短く直立する口縁部と最大径を体部上位にもつ。底部は上げ底状で、外見からは高台が付けられているのが分からない。	内面にロクロで巻き上げた痕跡が明瞭に認められる。	第2層出土の破片と接合しているが、体部下半から底部にかけての破片がすべてこの土壌から出土していることから、堆積層の調査時に引っ掛けあげた結果と考え、この遺構からの出土した、とした。内部に茶色の物質がべっとり付着している。
9-63	土壌11 (LN57)	土師質土器 甕	口径 47.9 残存器高 6.7	口縁部と体部のごく一部のみ残存。口縁部は体部から外反して開き、断面形は底辺を口縁部上面におく三角形を呈する。	口縁部上面から外面にかけてはヨコナデ調整。口縁部内面は横方向の目の粗い刷毛目。体部外面は平行タタキ調整。内面は欠失しているため不明。	17世紀代。
10-64	P35 (LN28)	磁器 椀	口径 12.0 残存器高 4.0	伊万里焼の染付の椀である。底部は欠失している。	他の出土例から見て、この椀もおそらく見込みは蛇の目粗ハギ。	18世紀代。
10-65	P35 (LN28)	磁器 椀	口径 11.2 器高 4.7 高台径 4.8 高台高 0.8	伊万里焼の染付の椀である。	見込みは蛇の目粗ハギ。	18世紀代。
10-66	P35 (LN28)	砥石	最大長 8.7 最大幅 7.6 最大厚 5.8	直方体の砥石。	石材は流紋岩（森山義博氏の鑑定による）。長さに対する両端面には破損面を再研磨している状況が観察できることから、もともとはもっと長さのある砥石であったと想定される。	仕上げ砥石。
10-67	P35 (LN28)	丸瓦	残存長 23.2 残存幅 11.1 厚さ 1.8 玉縁部長 1.7 連結部幅 1.2	玉縁式丸瓦である。両側縁部と広端部側は欠失している。	玉縁部を作りつけた瓶型の型木を使用している。玉縁部は短く、また玉縁部と筒部の境は緩やかである。凹面は布筒の縦合わせ目と刺子の反映痕が認められる。布目の折り目は摩滅のため観察できない。刺子は布筒に併行する方向で縫われている。刺子痕跡は玉縁部と筒部の境目に顕著に観察できる。凸面は摩滅のため調整痕は観察できない。	
10-68	P35 (LN28)	平瓦	残存長 26.4 狭端幅 22.0 広端幅 24.2 厚さ 1.4	一枚作りの平瓦である。	内外面ともナデ調整。色調は燻された灰色である。側面は凹面側にナデ調整が施されて丸みをもつ。それに対して凸面側は側面を切り取り調整したあと調整を加えていないバリ状に立ち上がっている。	
10-69	P36 (LN22)	瓦質土器 羽釜	口径 23.8 罫部径 32.0 罫部幅 1.2 残存器高 6.7	口縁部から体部にかけて残存。わずかに内傾する口縁部となだらかな丸みをもつ体部をもつ。口縁部と体部の境には罫部が巡る。貼り付け位置は口縁部上面から底部に向かって約2.7cmの位置に罫部上面がくる。罫部はほぼ水平に延びるが、端部でわずかにつまみあげている。口縁端部上面は凹面を呈する。口縁部外面には3条の段が巡る。	口縁部外面と罫部はヨコナデ調整。口縁部内面から体部内面は横方向、あるいは斜方向の刷毛目調整。体部外面は横方向のヘラケズリ調整。	14世紀後半。
10-70	P36 (LN22)	瓦質土器 羽釜	口径 20.0 罫部径 24.4 罫部幅 1.06.0 残存器高	口縁部から体部にかけて残存。ほぼ直立する口縁部となだらかな丸みをもつ体部をもつ。口縁部と体部の境には罫部が巡る。貼り付け位置は口縁部上面から底部に向かって約2.4cmの位置に罫部上面がくる。罫部はほぼ水平に延びる。口縁端部上面は平坦である。口縁部外面には2条の段が巡る。	口縁部外面と罫部はヨコナデ調整。口縁部内面から体部内面はナデ調整。体部外面は横方向のヘラケズリ調整。	
10-71	P36 (LN22)	陶器 皿	口径 12.9 器高 3.1 高台径 3.9 高台高 0.5	高台の付いた皿である。平坦な底部から大きく開いて立ち上がった後、外反して開いて延びる口縁部をもつ。口縁端部は上方につまみあげる。	ロクロでの巻き上げ痕が明瞭に観察できる。高台部分、高台より中央の底部外面には釉薬がかけられていない。	
12-72	カクラン (LN56)	磁器 蓋	口径 9.1 器高 2.8 つまみ部径 4.9 つまみ部高 0.9	伊万里焼の染付の蓋である。		杯かもしれない。
12-73	カクラン (LN56)	磁器 椀	口径 10.0 器高 5.0 高台径 4.3 高台高 0.7	伊万里焼の染付の椀である。		

表2 遺物観察表（その7）

挿図 番号	遺構 土層	種類	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
12-74	カク ラン (LN56)	陶器 鉢	口径 20.0 残存器高 6.9	底部は欠失している。 内湾する口縁部に丸みのある体部をもつ。口縁 端部は丸くおさまる。	口縁部内外面、体部内面はヨコナデ調整。体部 外面は横方向のヘラケズリ調整。	
12-75	カク ラン (LN56)	陶器 播鉢	口径 36.4 底径 16.2 推定器高 13.9	平底の底部から大きく外傾して開く体部から、屈 曲して直立する口縁部は受け口状を呈する。口 縁部内面には2条の凹線が巡る。 口縁部外面には3条の凹線が巡る。	内外面とも回転ナデ調整。体部から底部内面 には播目が施されている。 体部外面は横方向のヘラケズリ調整。底部外面 はナデ調整。	堺播鉢。
12-76	カク ラン (LN56)	軒丸瓦	瓦当部直径 13.6 中房径 5.4 厚さ 1.9 外縁部幅 2.2 外縁高 0.6	左巻き三つ巴文。 内区には頭部が大きな巻き込む巴文。尾の先端 部が接しあうことはない。 外区には直径1.1cmの珠文を16個配す。 外縁は素縁。 丸瓦部は瓦当部との接合箇所がわずかに残存す るだけである。	范型への詰め込み方、瓦当部と丸瓦部への接合 の仕方などは観察できない。 瓦当部裏面は中央部がナデ調整、周縁部は円周 に沿ってナデ調整。 丸瓦部の接合に際して、凹面側に粘土を少し足 して、撫で付けるようにして接合している。	
12-77	カク ラン (LN56)	軒平瓦	瓦当部幅 7.8 残存長 6.3	中心飾りに花卉を置き、おそらく左右にデフォル メされた均整唐草文が配されていたと推測でき る。 瓦当部は段頸である。瓦当部の左右、外縁部分 が欠失している。	瓦当部裏面は横方向のナデ調整。	

版 圖



上層遺構検出状況（北から）



下層遺構検出状況（北から）



Pit35遺物出土状況（南東から）



溝2底面遺物出土状況（西から）



溝2土層断面 (A-A') (東から)



溝2土層断面 (B-B') (西から)



溝1 完掘状況 (南東から)



井戸1 (北から)



下層遺構完掘状況（東から）



調査区西壁土層断面（南東から）



調査区南壁土層断面（北西から）



調査風景（北西）から

報告書抄録

ふりがな	さくらいいせきほうこくしよ							
書名	桜井遺跡報告書							
副書名								
シリーズ名	富田林市遺跡調査会報告							
シリーズ番号	21							
編著者名	横山 成己 藤田 徹也 栗田 薫 (編)							
編集機関	富田林市遺跡調査会							
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 ☎0721-25-1000 (代)							
発行年月日	2015年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さくらいいせき 桜井遺跡	とんだばやしし 富田林市 かわづらちょう 川面町1丁目	27214	14	34° 31' 2"	135° 36' 50"	2002.10.18 ～ 2002.11.8	200m ²	共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
桜井遺跡	集落址	中世～近世	建物, 溝, 土壇, ピット		瓦質土器, 土師質土器, 瓦, 寛永通宝		天平期の新堂廃 寺で所用されて いたものと同じ 平瓦が出土	

桜井遺跡報告書

発行年月日 2015年3月31日
 編集・発行 富田林市遺跡調査会
 住 所 富田林市常盤町1番1号
 印 刷 橋本印刷株式会社